

亀ヶ崎城跡

第2次発掘調査報告書

財団法人
山形県埋蔵文化財センター



* 6 - 1 9 9 4 - 7 3 6 - 0 1 *

6-1994-736-01

1994



財団法人 山形県埋蔵文化財センター

かめ が さき じょう あと
亀ヶ崎城跡
第2次発掘調査報告書

平成6年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、亀ヶ崎城跡第2次の調査成果をまとめたものです。

亀ヶ崎城跡は山形県の北西部に位置する酒田市にあります。

酒田市は環日本海貿易都市として、木材や農産物等の商工業製品の積み出し港として目覚ましい発展を展開しております。

調査は、貞享年中亀ヶ崎城図に描かれた二の丸中心部にあたる地区を調査し、城代の屋敷跡と考えられる礎石列や、北廻帰船によって運び込まれた陶磁器等が発見され、江戸時代の生活様相が窺いします。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産といえます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かなくらしは私たちが等しく切望しているところです。近年高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区内の遺跡の調査は、埋蔵文化財と開発事業実施のため、適切かつ迅速に行われることが今日求められています。こうした要請に適切に対処するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成5年4月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に応え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が遂行されるようご支援ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成6年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場清耕





色絵磁器・蓮華



玩具

例 言

1 本書は山形県立高等学校校舎等整備事業に係る「亀ヶ崎城跡第2次」発掘調査報告書である。

2 調査は山形県教育庁文化課の調整を経て、教育庁総務課の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名 亀ヶ崎城跡 (ASTKJ-2) 遺跡番号2071

所在地 山形県酒田市亀ヶ崎1-3-60

調査期間 発掘調査 平成5年4月1日～平成6年3月31日

現地調査 平成5年5月11日～平成5年8月4日 延べ63日間

調査主体 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

発掘調査・資料整理担当者 調査研究課長 佐々木洋治

主任調査研究員 野尻 侃

嘱託職員 川田 嘉信

4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県教育庁総務課、山形県土木部建築課、庄内支庁建設部建築課、山形県立酒田東高等学校等関係機関の協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。

5 本書の作成・執筆は、野尻 侃、川田嘉信が担当した。編集は安部 実、伊藤邦弘が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。

6 遺構平面図については、株式会社シン技術コンサルに実測業務を委託した。

7 出土遺物、調査記録類は、山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は以下のとおりである。

S B………礎石建物跡 S D………溝 跡 S X………性格不明遺構

E B………礎 石 R P………完形・一括陶磁器 R S………石製品

RM………金属製品 RW………木製品

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

(1) 遺構概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

(2) グリッドの南北軸は、N-38°-Eを測る。

(3) 遺構実測図は1/40, 1/100、遺物実測図は1/2, 1/4, 1/8縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付けた。また、遺物実測図中のスクリーントーンは漆塗り部分を示す。

(4) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通にした。

(5) 遺物観察表中()内数値は、図上復元による推計値、または残存値を示している。また、出土地点欄の層位では、Fは遺構覆土内出土、ローマ数字は遺跡を覆う土層(基本層序)を表している。

(6) 遺物観察表中の色調の記載については、1993年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。

(7) 遺物観察表中の計測値及び、形状特徴、装飾、製作等の欄は東京都新宿区細工町遺跡報告書凡例基準や、同内藤町遺跡調査会〔江戸のやきものと暮らし〕を参考とした。

目 次

序	
卷頭カラー写真	
例 言	
目 次	
I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	2
II 遺跡の立地と環境	
1 遺跡の立地	3
2 歴史的環境	3
III 検出された遺構	
1 遺構の分布	7
2 S B 1 碇石建物跡	7
3 石 列	8
IV 出土した遺物	
1 遺物の分布	11
2 陶磁器	11
3 土 器	26
4 土製品	26
5 木製品	26
6 石製品	26
7 金属製品	26
V 調査のまとめ	27
報告書抄録	28

挿 図

第1図 調査概要図	1	第8図 出土遺物実測図(2)	13
第2図 亀ヶ崎城跡と周辺の城館跡	3	第9図 出土遺物実測図(3)	14
第3図 貞享年中亀ヶ崎城図	5	第10図 出土遺物実測図(4)	15
第4図 S B 1 碇石建物跡	8	第11図 出土遺物実測図(5)	16
第5図 遺構配置図	9	第12図 出土遺物実測図(6)	17
第6図 遺跡の層序	9	第13図 出土遺物実測図(7)	18
第7図 出土遺物実測図(1)	12		

図 版

図版1 調査区全景 遺跡の層序	
図版2 S B 1 碇石建物跡 E X 6 0 木枠組遺構検出状況	
図版3 R P16・32・37・58・131・172・173・183, RW178・木蓋・木製品出土状況	
図版4 R P23陶質人形, R P38亀型土製品, R P36鶏型土製品, R P59吉祥皿, RM46把手, 三島手唐津陶器皿, 底板出土状況, 調査風景	
図版5 梱類, 壕類 (磁器)	
図版6 梱・壙・化粧具, 仙神具	
図版7 化粧具, 鉢, 甕類	
図版8 鉢, 加熱具	
図版9 土・陶質人形, 飯事道具	
図版10 木製品	

付 表

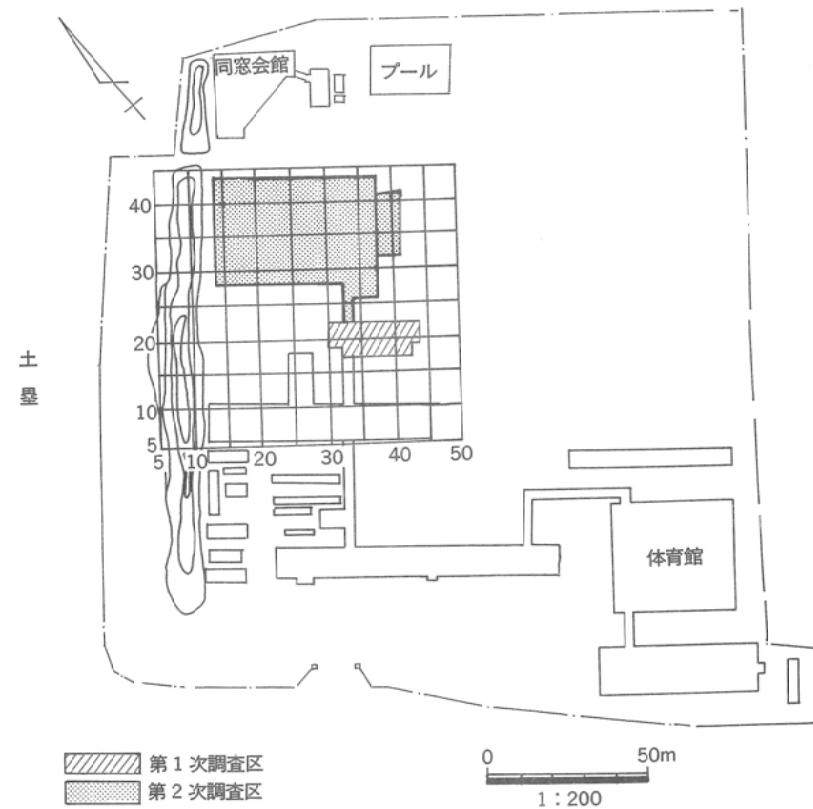
表1 亀ヶ崎城跡調査工程表	2	表5 出土遺物観察表(2)	20
表2 亀ヶ崎城の変遷	4	表6 出土遺物観察表(3)	21
表3 亀ヶ崎城代在任一覧表	6	表7 出土遺物観察表(4)	22
表4 出土遺物観察表(1)	19	表8 出土遺物観察表(5)	23

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

東北地方日本海に面した酒田市は海上交易による経済発展に目覚ましい進展を示している都市である。酒田市は室町時代以前には坂田村と呼ばれた寒村であったが、江戸時代に入ると、最上川河口に発展した日本海交易の湊町として栄え、町を守る要として亀ヶ崎城が構築され、出羽庄内藩の経済を支える町並みを呈していた。

亀ヶ崎城跡は、その後明治時代以降は酒田県庁、旧制酒田中学校、県立酒田東高等学校と公設の施設箇所となり、現在に至っている。平成2年度には校舎新築事業が実施され緊急発掘調査（第1次）が行われ、貞享年中図（第2図）に描かれた本丸と二の丸との境界を示す堀跡や土塁跡と共に江戸時代の生活用具が多数発見された。平成5年度には県立高等学校校舎等整備事業（体育館）が計画され、山形県教育庁文化課は事業実施課である県教育庁総務課と協議を重ね、建設予定である体育館の範囲に限り、緊急発掘調査を実施することで合意を得た。このことから平成5年4月26日には総務課、酒田東高等学校事務部、県土木部建築課、庄内支庁建設部建築課と発掘調査事前打ち合わせ会を行った。また、調査は財団法人山形県埋蔵文化財センターが行った。



第1図 調査概要図 ($S = 1 : 200$)

2 調査の経過

発掘調査は平成5年5月11日から8月4日までの延べ63日間を第2次発掘調査として実施した。調査では第1次調査での調査内容や調査で計画された調査区の基準を踏襲し、2m単位のグリットを建設予定地の範囲に設定した。以下に調査の経過を略述する。

5月11日～21日 機材搬入 調査時の安全祈願 調査範囲の安全対策施設設置 調査区設置作業 重機導入による盛土除去 調査区粗掘（地表下140～160cmで江戸時代の文化層を確認、地表下140cmまでは盛土層）

5月24日～31日 重機導入後の面整理 調査区全景写真撮影

6月1日～18日 調査区を10m単位に小区割し、手堀による包含層掘り下げ。近世陶磁器多数出土。調査区東部に幅120～160cmの溝状遺構を南北に検出。この期間は降雨の日が多く作業が難航した。

6月21日～30日 出土遺物の出土地点平板測量 遺物出土状況写真撮影 検出遺構平板測量 調査区中央部に礎石と考えられる上面が平坦な石と東側に南北走る溝跡を検出、SD58溝状遺構と呼称する。

7月1日～16日 2回目の重機導入 SD58掘り下げ SD58に角柱で囲まれた板材を検出SX60と呼称 陶磁器、土人形、鉄製品、木製品多数出土

7月16日～30日 SX60を中心とした礎石列を検出、礎石建物跡と確認 30日には調査成果を～8月4日 公表する説明会を開催し、8月4日に機材を撤収、調査を終了した。

表1 亀ヶ崎城跡調査工程表

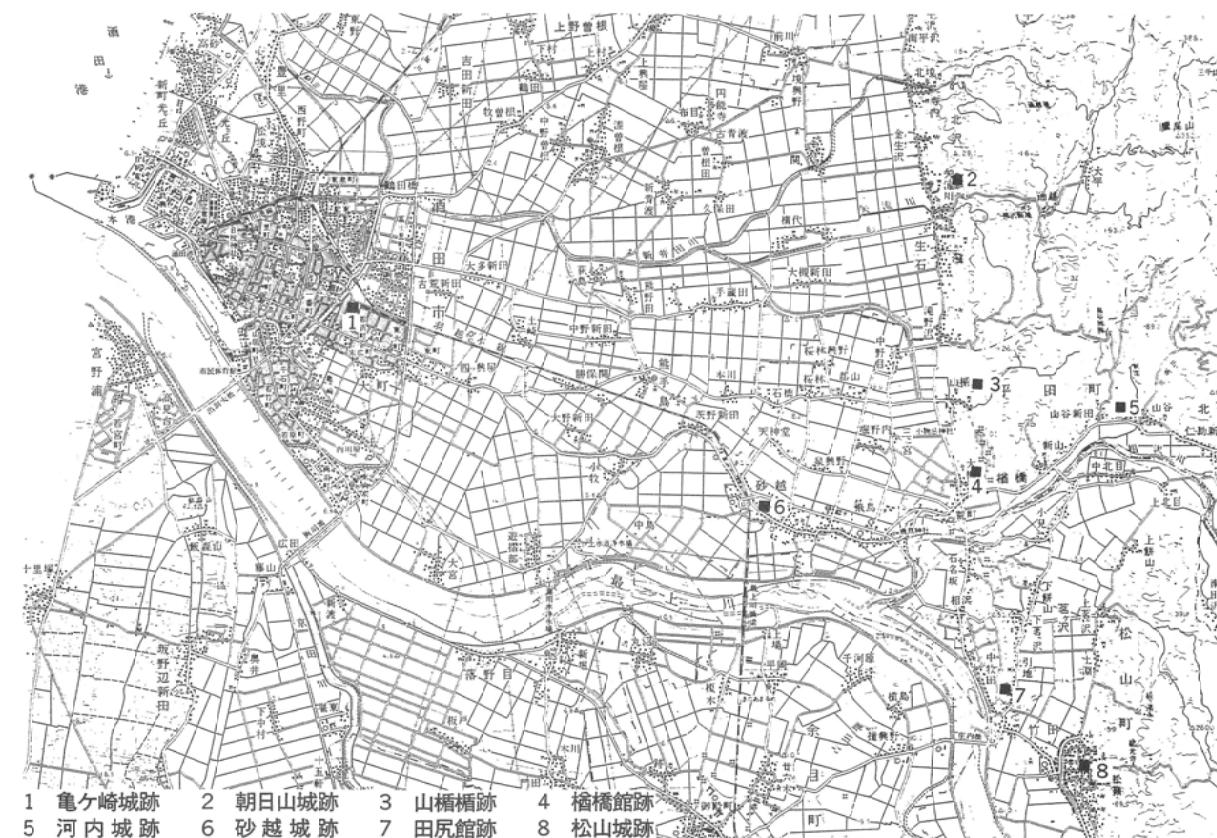
作業項目	5月					6月					7月					8月				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
現地作業	機材搬入・環境整備																			
	グリット設定・トレンチ調査																			
	表土除去（重機）																			
	手堀り・面削り																			
	遺構検出・精査																			
	記録（写真撮影等）																			
	写真測量																			
	機材搬出																			
備考		鉢 入式 調査開始													調査終了 機材撤収					

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

吾妻、飯豊山系を源とした最上川は山形県内陸部を貫流し、内陸盆地の中小河川を合流させながら北流する。北流した最上川は最上地方で西流し、出羽山地を断ち切るように庄内地方に広大な沖積平野を形成する。平野を蛇行した最上川は、出羽山地から源を発する中小河川を集めし、酒田市街地の南部で日本海に流れ出る。出羽山地から源を発した新井田川は、最上川の河口で合流し広大な三角州を形成している。

亀ヶ崎城跡はこの合流した自然堤防上の微高地に築城されている。標高は3～3.5mを測る。城域は新井田川をはさんで左岸が本丸と二の丸、右岸に三の丸を配した水城的性格を持ち、要地酒田の城として十二分にその機能を果たしている。



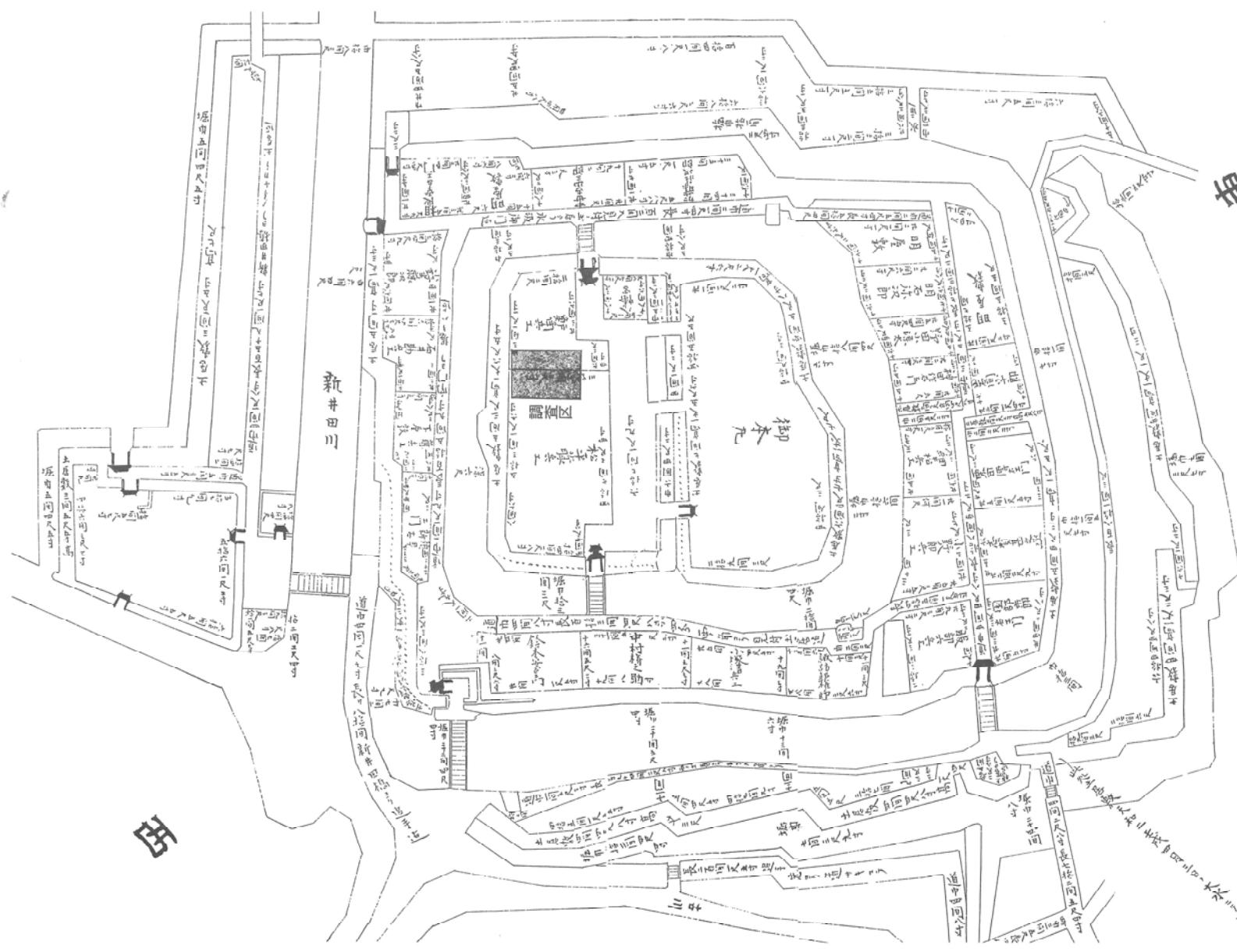
第2図 亀ヶ崎城跡と周辺の城館跡 (S = 1 : 100,000)

2 歴史的環境

酒田の街は出羽の国内外を代表する港町として最上川河口に発達した交易拠点を形成している。また、市街地北東部には、平安時代に出羽の国の国府として推定された、国指定史跡「城輪柵跡」が存在し、古くから中央との交流があったと考えることができる。

表2 亀ヶ崎城の変遷

不祥	いまの酒田市四ツ興野付近に大淨山東禪寺と称する真言宗の寺が建つ。
1466 文正1	遊佐大橋城主遊佐氏が、東禪寺を攻める。遊佐太郎繁元、東禪寺城主となる。
1467 文正2	応仁の乱はじまる。(~1477)
1478 文明10	繁元、東禪寺を現在地県立酒田東高等学校敷地に移築したとされる。
1512 永正9	東禪寺合戦。大宝寺武藤氏と砂越氏が東禪寺城で戦い、武藤氏敗れる。
1538 天文7	武藤晴時、東禪寺城と砂越城を攻め川北を治める。東禪寺氏滅び武藤氏一門を以て離ぐ。
1582 天正10	本能寺の変。国内再び無系統制。
1583 天正11	武藤老臣前森藏人、最上義光と通じ尾浦城を攻め、武藤義氏自刃する。 前森藏人、東禪寺城主となり、東禪寺城主筑前守を名乗ったとされる。
1584 天正12	義氏の弟武藤義興、上杉景勝と結び庄内統制に務める。 上杉・武藤氏と最上・東禪寺氏の庄内争奪の様相強まる。
1587 天正15	東禪寺筑前守が反乱。尾浦城落城、武藤義興自刃する。
1588 天正16	最上義光と伊達政宗の対立深刻化。上杉方の本庄繁長、庄内に進攻。 十五里ヶ原の合戦。東禪寺筑前守討死。繁長、東禪寺城に入城。武藤義興の跡目で繁長の二男、武藤義勝、出羽国守となる。庄内は実質、上杉支配下となる。
1590 天正18	秀吉の命で上杉景勝、出羽国内の検地を開始。
1591 天正19	秀吉、本庄繁長・武藤義勝の所領没収、上杉に与える。東禪寺城代に河村彦左衛門。
1599 慶長4	志田修理亮義秀、東禪寺城主となる。川村兵蔵、平城としての東禪寺城を整備する。
1600 慶長5	関ヶ原の戰。関ヶ原出羽合戦もはじまる。
1601 慶長6	最上義光、上杉配下の東禪寺城を攻め庄内を制する。亀ヶ崎城主3万石に志村伊豆守。
1603 慶長8	徳川家康征夷将軍となる。義光、東禪寺城を亀ヶ崎城、大宝寺城を鶴ヶ岡城に改称。
1611 慶長11	亀ヶ崎城主志村伊豆守没する。九郎兵衛光惟、鶴ヶ岡方に斬殺される。
1614 慶長19	最上義光没する。九郎兵衛光惟、鶴ヶ岡方に斬殺される。
1615 元和1	徳川秀忠一城の制を定める。庄内では、鶴ヶ岡城と亀ヶ崎城の二城が特に許される。
1622 元和8	最上氏改易される。酒井忠勝、庄内に入部(14万石)。亀ヶ崎城を本城、亀ヶ崎城を支城とする。亀ヶ崎城代に忠勝の佐父松平甚三郎が当たる。町奉行1名物頭2名平士20名。このころから、亀ヶ崎城三の丸は、侍屋敷が取り壊され、待割に組み込まれる。
1672 寛文12	前年の東廻り航路開発に続き、最上郡領米が西廻り航路で初出船する。
1713 正徳3	『編年私記』に、この年、酒田城代屋敷建つの記録がある。
1868 明治1	戊辰戦争(~1869)。庄内藩主酒井忠篤開城降伏。酒田に軍務官出張所、民生局を設置。
1871 明治4	廢藩置県。酒田は大泉県を経て酒田県となる。
1880 明治13	城内建物を民間に払い下げる。その後建物を取り壊し焼地とする。
1920 大正9	県立酒田東高等学校(現在の県立酒田東高等学校)



第3図 貞享年中亀ヶ崎城図

港と穀産豊かな平野を背後にひかえた酒田は、戦国時代群雄割拠の武将には魅力的な土地でもあった。亀ヶ崎城跡の築城年代について、筆濃餘理（註1）に天平年中頃と推定されている。しかし、建久2年（1191）東禅寺城主武藤出羽守が、城内に八幡神社を勧進したと記録もあり、その築城年代は不明である。いずれにしても15世紀後半には東禅寺城と呼称され、巴城ともよばれていた。堀と土塁で囲まれた総曲輪として整備されている。また、城を囲む袖ノ浦周辺を整備し、新井田川等の河川による船運を興し、町衆が主体となった自治機能を発揮させ、活気ある商業都市を形成していた。織豊時代の天下統一の権力が強まると、町衆の自治機能が否定され、酒井家が入部するころには、幕府や藩の行政機構に組み込まれた。

出羽庄内藩は、元和元年（1615）徳川秀忠は一国一城の制を定めるが、鶴ヶ岡城と亀ヶ崎城の二城が特に許される。亀ヶ崎城は鶴ヶ岡城の支城として城代がおかれ、城下の治安や行政・軍事面での責任者となる一方、商品流通の拠点となる酒田港の維持にも携わっており、施政上重要な役割を担っていた。

註1 安倍親任 筆濃餘理上巻 鶴岡市史 資料編 1977

表3 亀ヶ崎城代在任一覧表

城代氏名	在任期間	城代氏名	在任期間
松平 甚三郎	平和8 寛永6 1622 629	酒井 弾正	文化8 文化10 1811 1813
白井 惣右エ門	寛永6 寛永8 1629 1631	里見 外記	文化10 文化13 1813 1816
松平 甚三郎	寛永8 承応1 1631 1652	松平 武右エ門	文化13 天保5 1816 1834
松平 九郎兵衛	承応1 万治1 1652 1658	杉山 弓之助	天保12 天保14 184 1843
松平 藤兵衛	寛文10 元禄16 1670 1703	松平 甚三郎	弘化2 弘化3 1845 1846
松平 甚三郎	亮保17 元文4 1723 1739	酒井 奥之助	弘化3 弘化4 1846 1847
酒井 図書	寛延1 宝暦1 1748 1751	服部 濬兵衛	嘉永2 嘉永5 1849 1852
松平 甚三郎	宝暦1 宝暦8 1751 1758	松平 舎人	嘉永6 安政6 1853 1859
酒井 図書	宝暦13 安永6 1763 1777	酒井 奥之助	安政6 安政7 1859 1860
竹内 五兵衛	安永10 寛政7 1781 1795	加藤 宅馬	安政7 慶応4 1860 1868
酒井 内匠	寛政7 寛政11 1795 1799	朝岡 助九郎	慶応4 明治2 1868 1869
酒井 吉之允	享和2 文化7 1802 1810		

資料 酒田市史改訂版上巻より

III 検出された遺構

1 遺構の分布

亀ヶ崎城跡は江戸時代に出羽庄内鶴ヶ岡城の支城として港町酒田の発展を支えていた。発掘調査では、明治時代に廃城後は公的施設の設置箇所として利用され、数枚の埋土層が堆積しており、城内の施設が設置されては破壊され廃棄物として埋められたものと考えられる。

これらのことから、現地表面下1.4m～1.6mに亀ヶ崎城廃城後の埋土層が確認され、層内からは、陶磁器や、木製品、金属製品等の遺物が出土した。また、整地層の下部では長径60～85cmの自然石が等間隔に並び、自然石の上面が平坦になることから建物跡の礎石と考え、周辺を面整理しながら建物跡（SB1）の広がりを確認した。検出した部分は調査区の南東部、27～34～30～36グリッドである。建物跡と考えられた範囲内には、板材で囲まれた方形の施設が四隅を角材に支えられた状態で検出された。

そのほかの調査区域では、礎石と同レベルに小礫が線状に集中して検出され、屋敷の境を示す列石遺構と考えられる。

また、調査区の中央部25～16～19、25～21～23グリッドで検出された礎石列（EB81～EB83礎石、EB72～EB75礎石）は建物跡の礎石列と考えられるが、SB1とした建物跡と組み合わせることが出来なかった礎石列である。しかし、この2列の礎石列は東西方向に線上に並び、建物跡の一部とも考えられるが先述したとおり、SB1建物跡との主軸方向がやや南にずれていることや、礎石間の柱間が不規則な間尺を呈していることなど建物跡としての組み合わせにならなかったことによるものである。

2 SB1礎石建物跡（第4図、図版4）

調査区の南東部、27～34～30～36グリッド4層下面で検出した東西6間以上、南北5間以上の礎石建物跡である。建物跡は確認された梁行（EB68～71）長13.2m以上、桁行（EB62～68）長10.5m以上を測る。柱間距離は、梁行EB68～71礎石間は、EB68礎石から0.9m（3尺）、1.8m（6尺）、7.8m（26尺）を測るが、EB70とEB71礎石との柱間は梁行としての間尺が大きく、その間には1～2本の柱が存在するものと考えられ、建物範囲外の東側には礎石と思われる平坦な自然石が散乱している。桁行EB62～68礎石間は、EB62礎石から1.8m（6尺）、5.7m（19尺）、1.8m（6尺）、1.5m（5尺）、2.4m（8尺）を測り、EB63、EB64礎石との柱間距離が大きく1～2本の柱が存在していたものと考えられる。

また、EB64とEB65礎石に対応する東側に0.9m（3尺）の柱間距離をもったEB77、EB78礎石が確認され、方形になった建物跡内の納戸的施設と考えられる。またEB78からはEB65との線上に1.2m（4尺）等間にEB79、80礎石が並び、建物跡の間仕切りとなる礎石列と考えられるが、EB80礎石以降に線上に並ぶ礎石が検出されなかった。

これらの礎石には根固めとなる小礫は検出されなかったが、EB64礎石は二枚の偏平な自然石が重なって確認されており、柱の調整で2枚に施されたものと考えられる。

EB77礎石の北方1.3mには、一辺30～35cmの角材が1.2m（3尺）等間に方形に打ち込まれ

III 検出された遺構

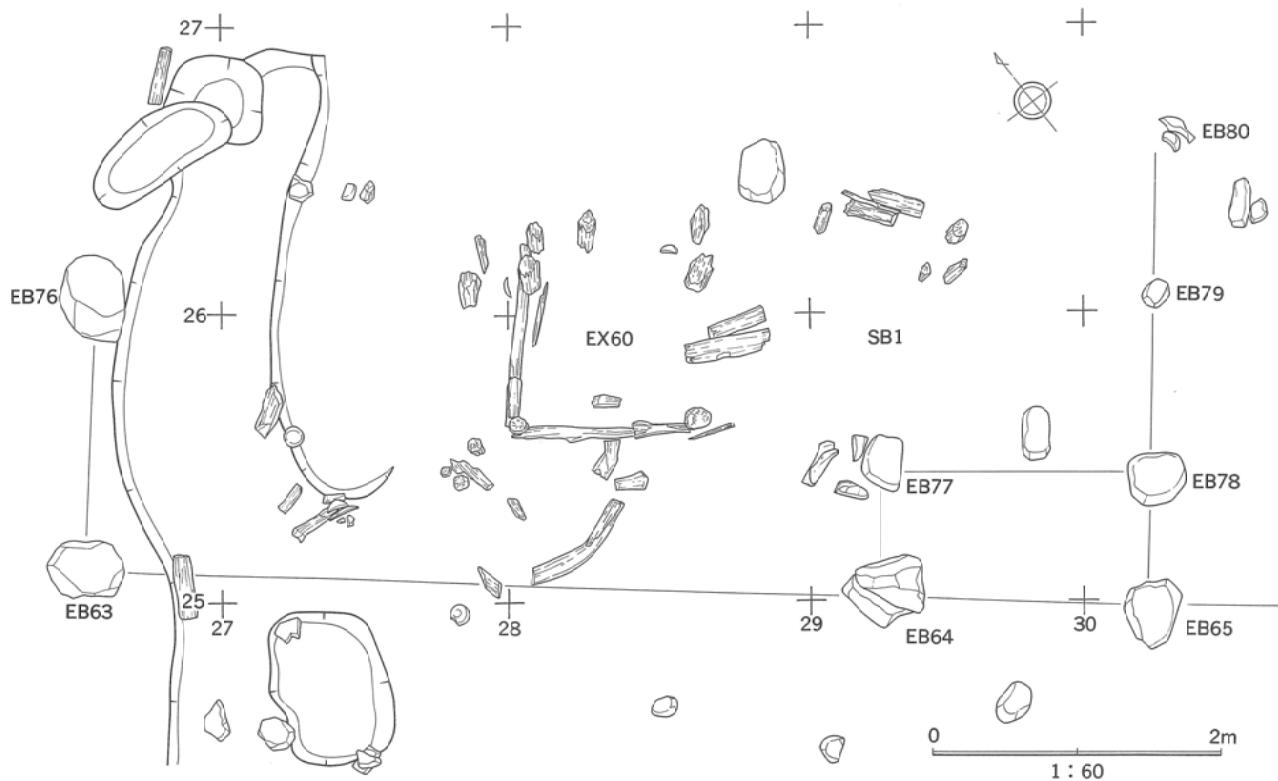
ている。EX60性格不明遺構と命名し、SB1建物跡内の付属施設として設置されたものと考える。

角材はいずれも手斧による面削りが施され、建物跡の柱として利用されたものと思われるが、柱は礎石の上に乗ったものではなく地中に打ち込まれた状態で確認されている。建物の土台柱として設置されたものと考えられる。角材の周囲は厚さ3cmの板材によって囲まれ、内部の土砂は泥炭となっている。

SB1礎石建物跡が検出された地区の埋土は、礎石が検出される上部まで整地による埋土層で、層内からは茶碗・皿・壺・甕・摺鉢・杯等の陶磁器や、陶質人形・土質人形・古銭・釘等の遺物が出土している。また、EX60遺構の周辺からは加工された木製品と木端が多数出土している。

3 石列（第5図）

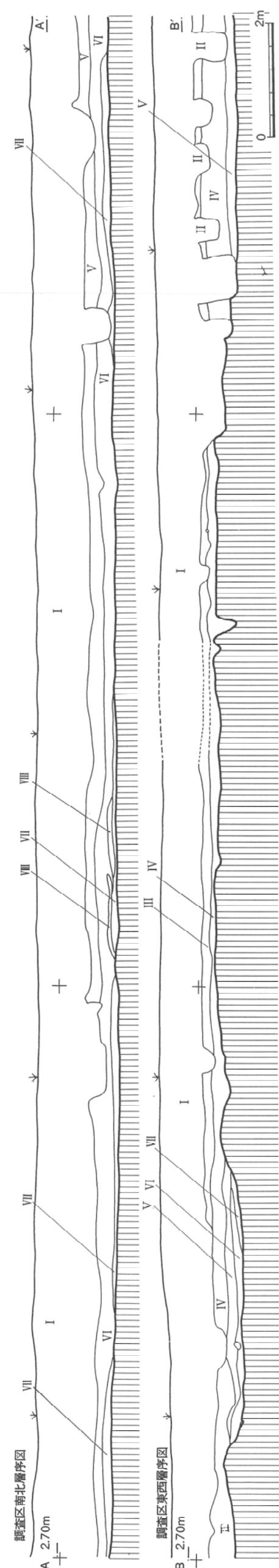
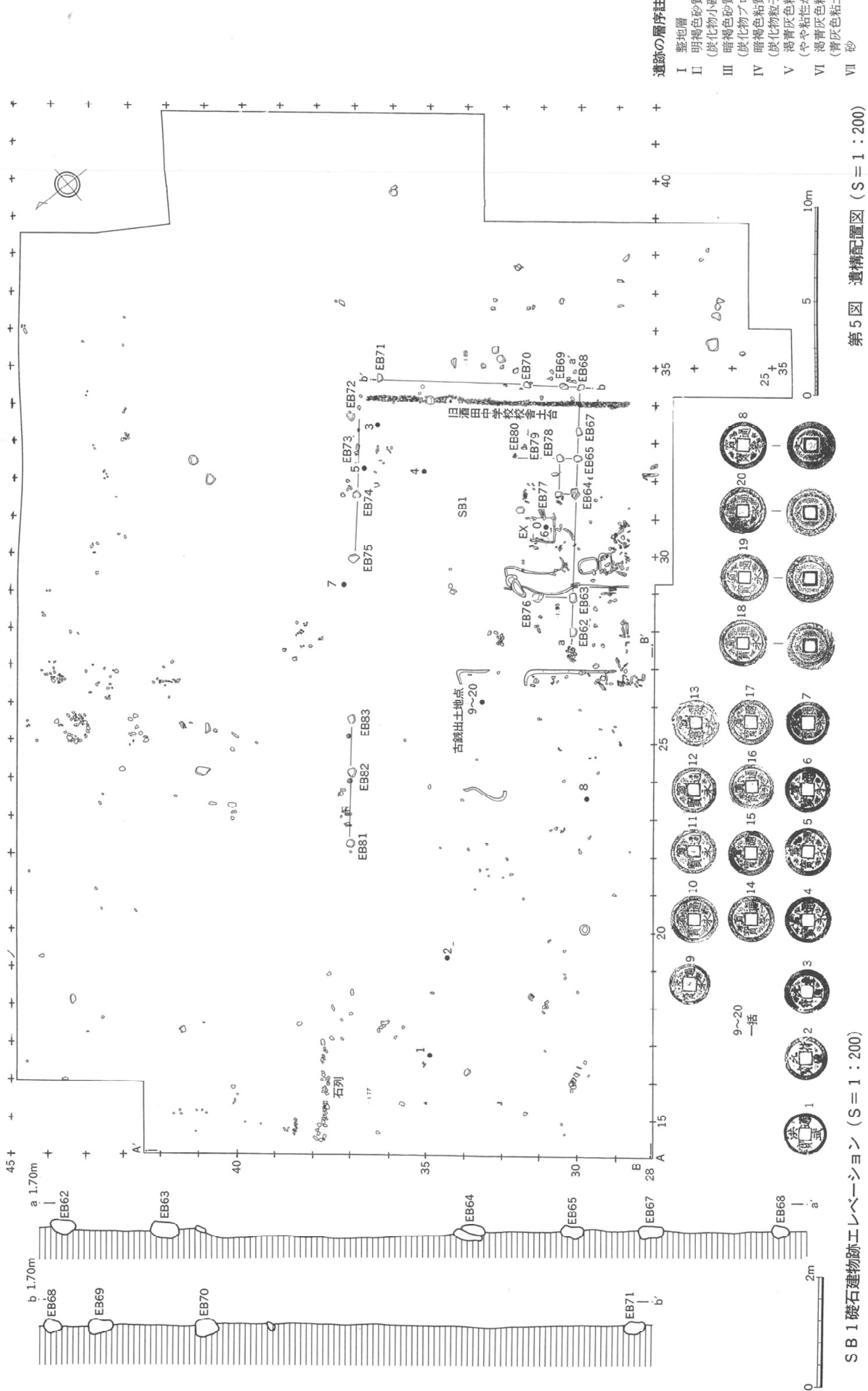
調査区14～18-24グリッド3層下面で検出された握り拳大の自然石が整然と線上に配置されており、屋敷間の境として配置されたものと考えられる。石列は幅35～60cmをもち、上部に塙等の構築施設の土台と考えられる。周囲の埋土層からは、茶碗・皿・摺鉢等の陶磁器が出土している。また、SB1建物跡のEB67礎石とEB68礎石間に検出された石列は、旧制酒田中学校校舎の土台となるもので、調査区北部に存在していた武道館へ通じる渡り廊下の土台固めの配石である。



第4図 SB1礎石建物跡

第6図 遺跡の層序 (S=1:40) - 9~10-

- 9 ~ 10 -



IV 出土した遺物

1 遺物の分布

調査で出土した遺物は整理箱にして総数67箱を数える。そのほとんどが陶磁器であるが、そのほかには煙管・硯・土製人形・木製品・石製品等がある。これらは調査区内のほとんどの区域で出土するが、特に調査区の南東部 y 軸27~39 - x 軸28~34グリッド 3 層からの出土が多い。しかし、調査区の北半部は旧酒田中学校の校舎が建築されたところであったがため比較的遺物の出土量は少ない。しかし、南半部は旧酒田中学校の中庭部分であったことで、盛土層が残存したものと思われる。このことは、第III章、検出された遺構でのべた S B 1 建物跡の範囲となり、明治期の建物跡が撤去された後に盛土されたため、その整地層に遺物が包含されたものと思われる。また、遺跡が城跡という特殊性から、限られた範囲内での構築物を建築しなければならなかつたということがいえる。また、遺跡の層序の中で約1.6m もの盛土がなされていることを確認しており、撤去しては整地し、構築を重ねていたものといえる。そのため整地の包含層からは各時期の遺物が混じり合つた状態で出土しており、明確な時期の細分は困難であった。しかし、第II章2節歴史的環境で述べた亀ヶ崎城跡の変遷で、文献上では1478年に現在の酒田市四ツ興野付近に東禪寺城として設営されたことが記されている。その後1603年、最上義光氏が東禪寺城を亀ヶ崎城と改名。最上氏改易後の江戸時代には、酒井家が入部し統治している。調査区での出土遺物は酒井家が鶴ヶ岡城を本城とし、亀ヶ崎城を支城とした1622年(元和八年)以降の遺物を主としている。ここでは、出土した陶磁器の器種別や土製品・金属製品・木製品等の遺物を図化し、記述する。

2 陶磁器

(1) 陶器 (第7~11図・図版5~8)

陶器の出土量は31箱を数える。器類では碗類、皿類、鉢類、片口類、甕類、瓶類、杓子類が出土している。大型の器類が多く、重量も大きい。

碗類

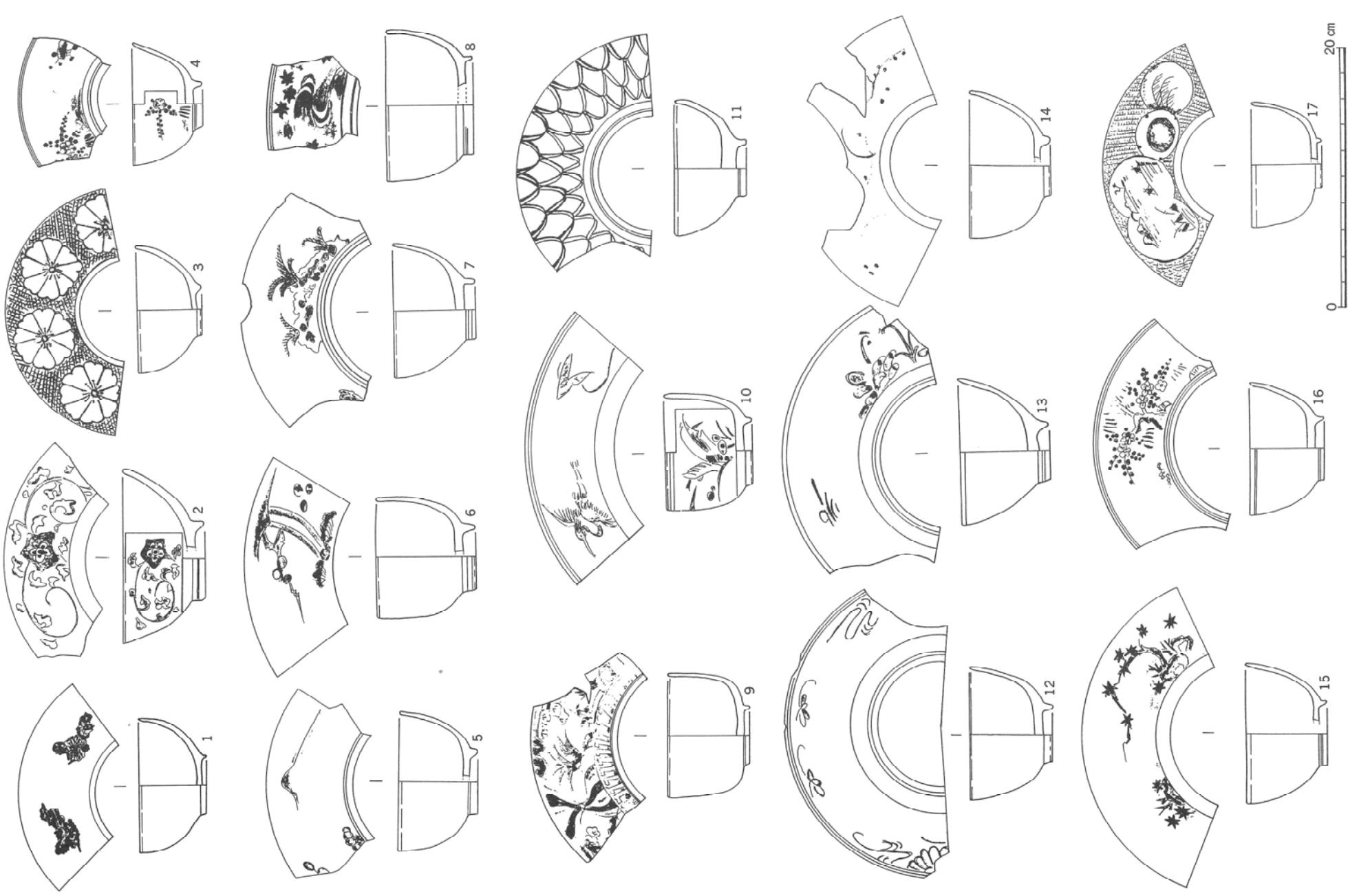
碗は京焼を模倣した装飾形態を示す22の腰折碗である。笹文を描いた美濃瀬戸系の陶器である。3点出土したが、文様施文と計測値が同一であったため一点のみ示した。揃い碗と考える。39~50に図示した碗は京焼写しと呼称される一群で、吳須で樓閣山水文や若松を器内面や外面に描いている。高台裏の露胎部には草書で「清水」(39・41・44・48), 「木下弥」(46・47), 「森」(43), 「新」(42), 「小松吉」(40) と刻印されている。肥前鍋島藩窯で制作されたもので、御室碗と呼称されている。時期は、1650年代中頃から1680年代に収まるものと考える。

皿類

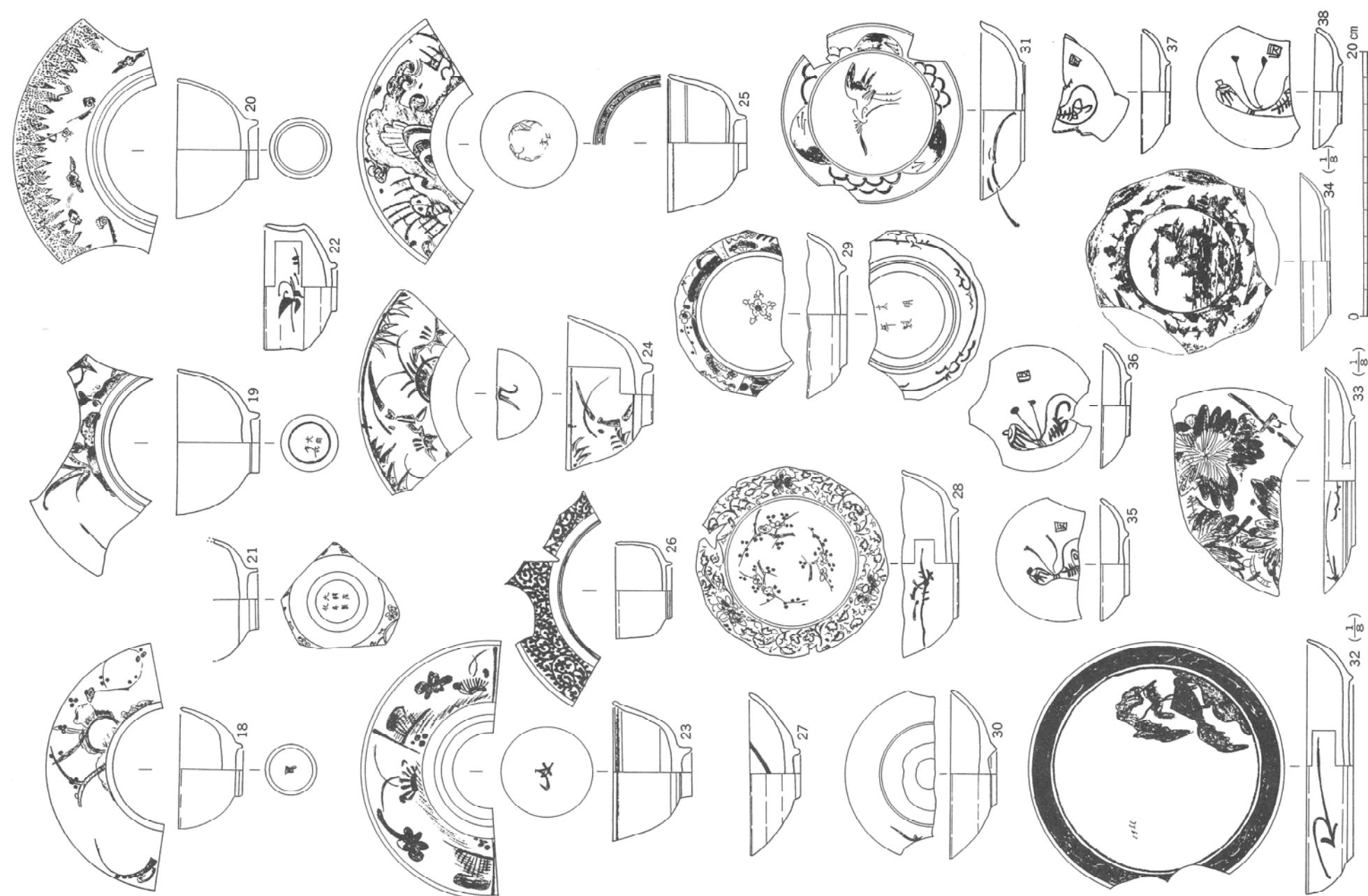
灰釉に施された27・30と31の染め付け皿がある。27・30は波佐見系の「くらわんか手」である。31は内面見込みに鷺絵が描かれた中皿である。

鉢類

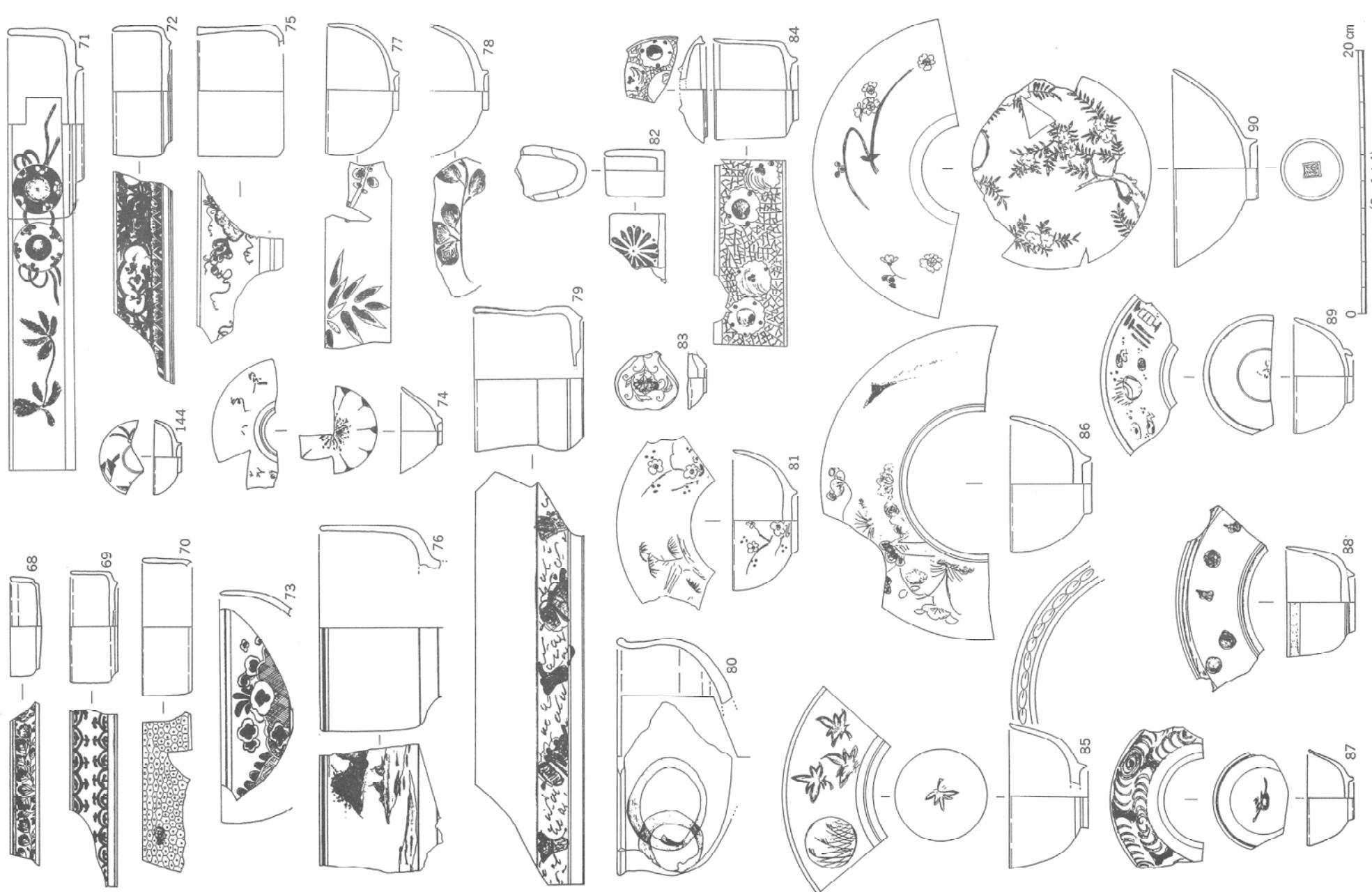
摺鉢が多数出土した。図示出来なかったが破片の観察では、12条から16条の摺り目が放射状



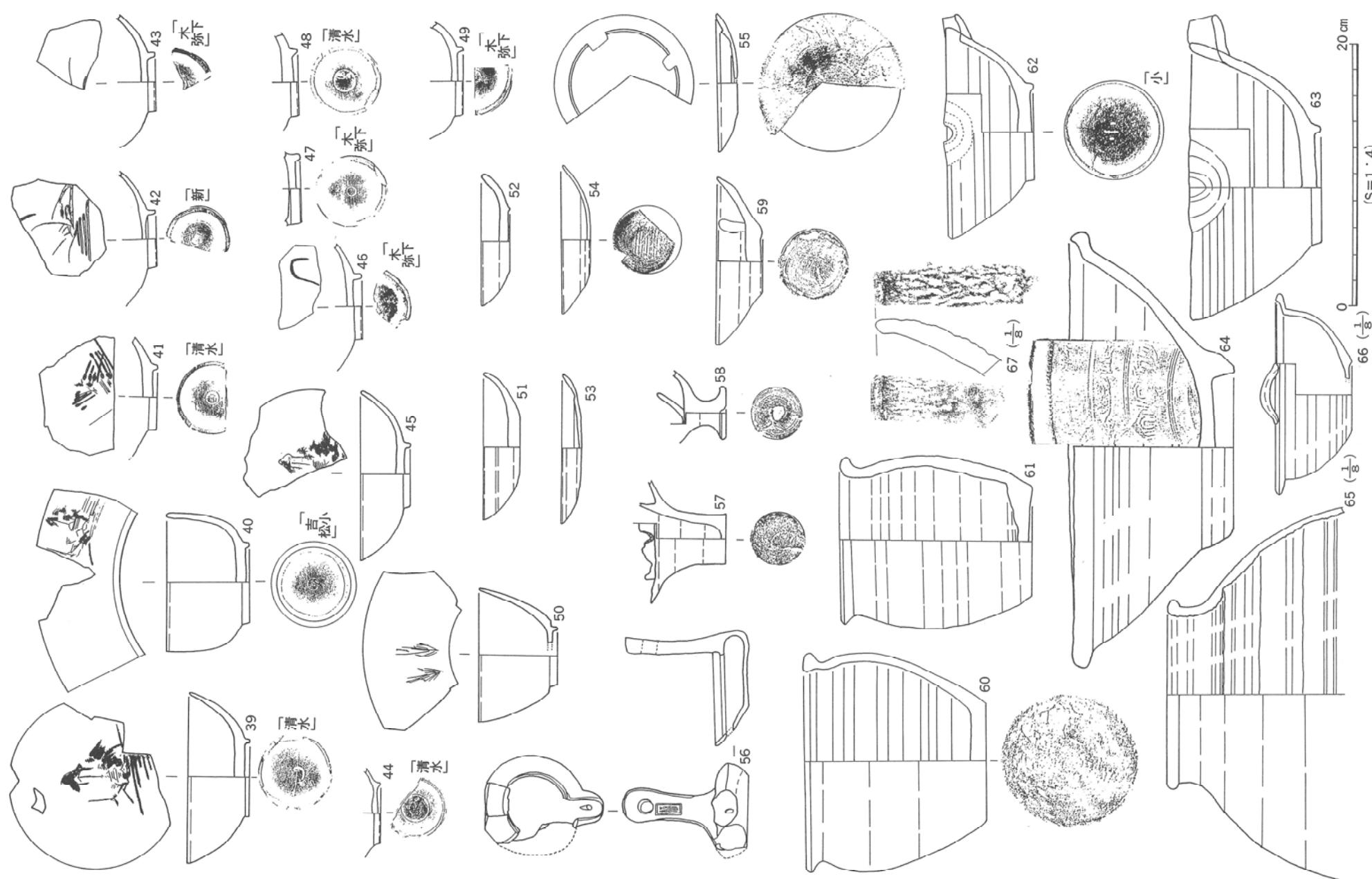
第7図 出土遺物実測図(1)



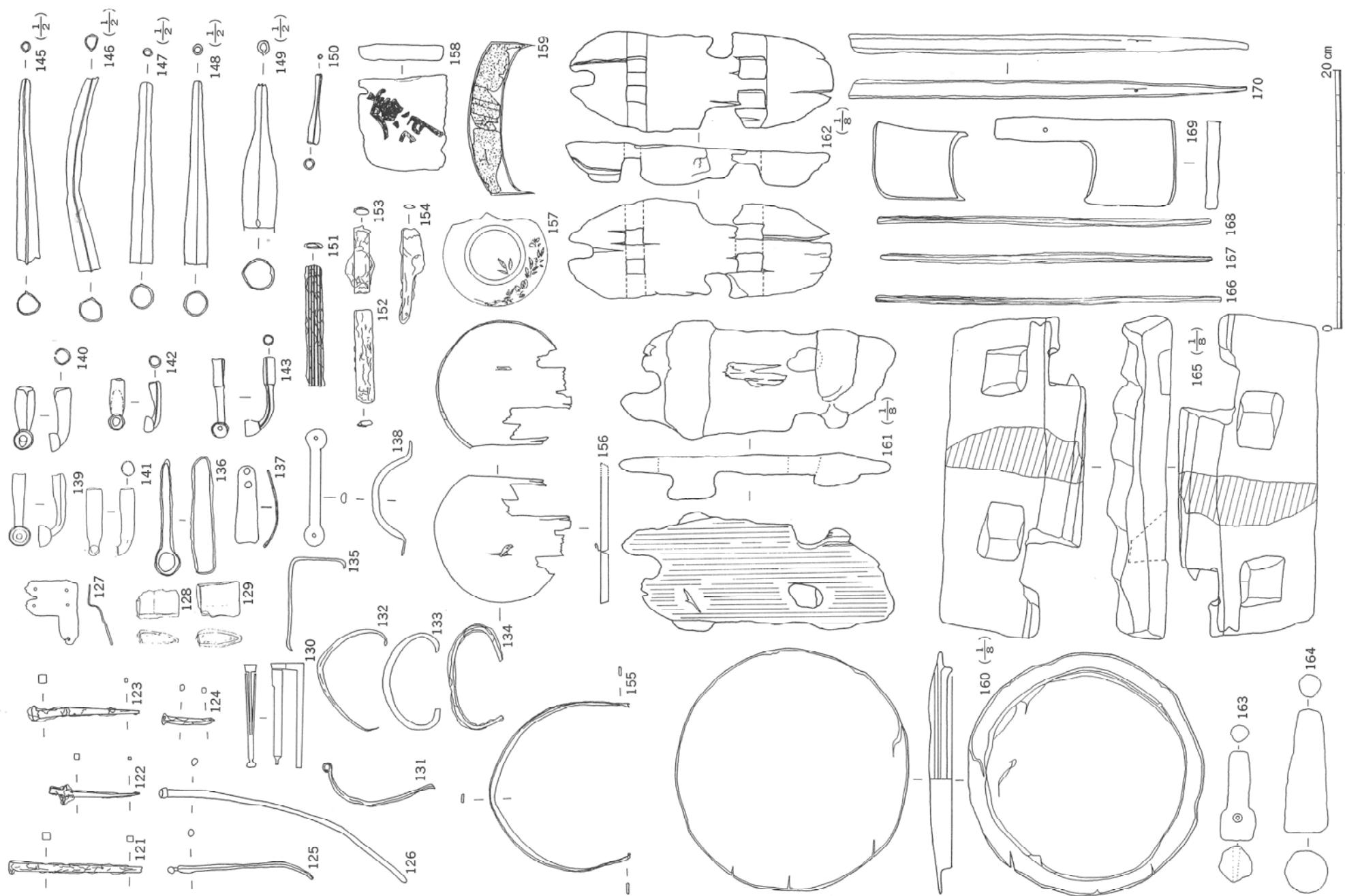
第8図 出土遺物実測図(2)



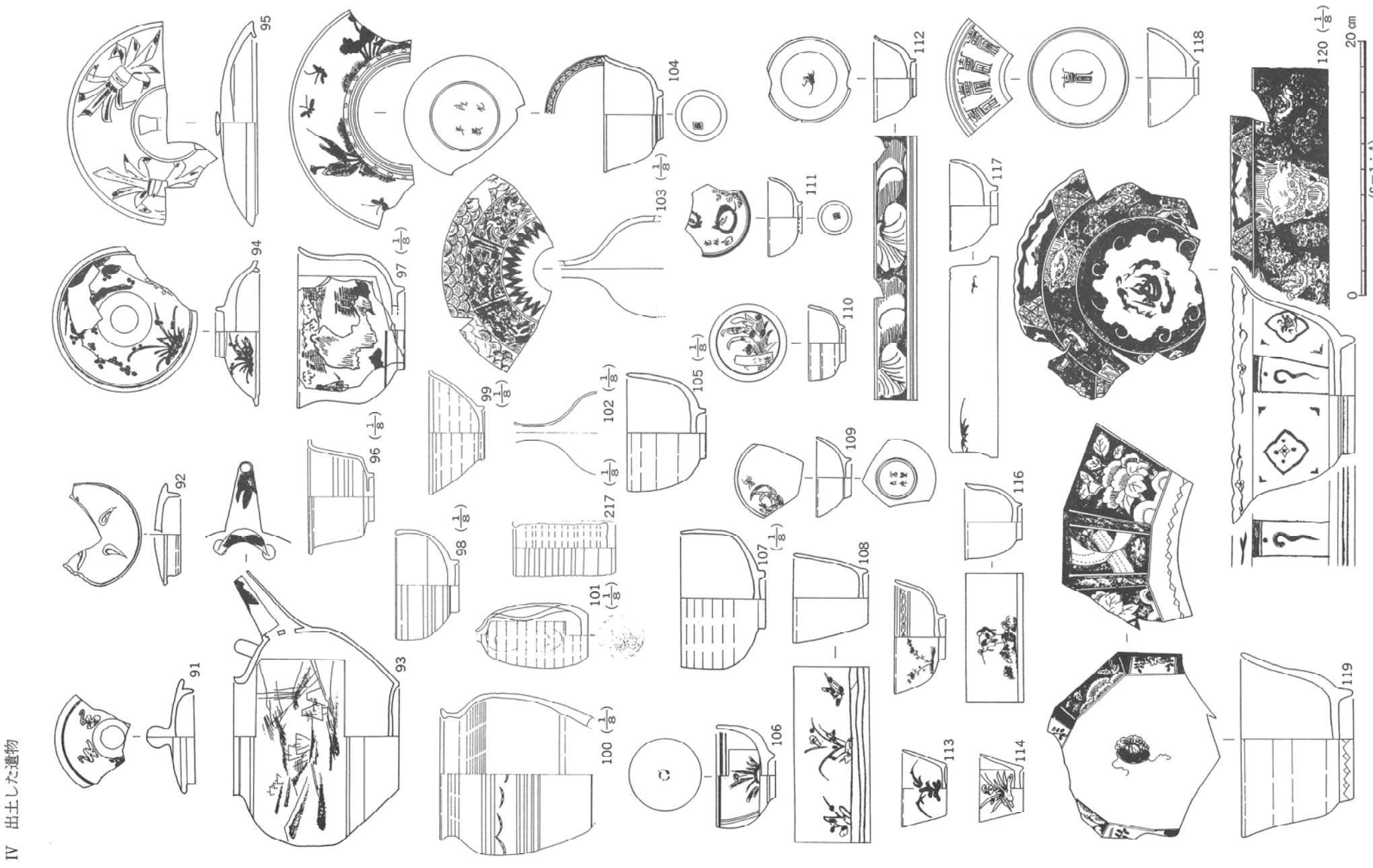
第10図 出土遺物実測図(4)



第9図 出土遺物実測図(3)

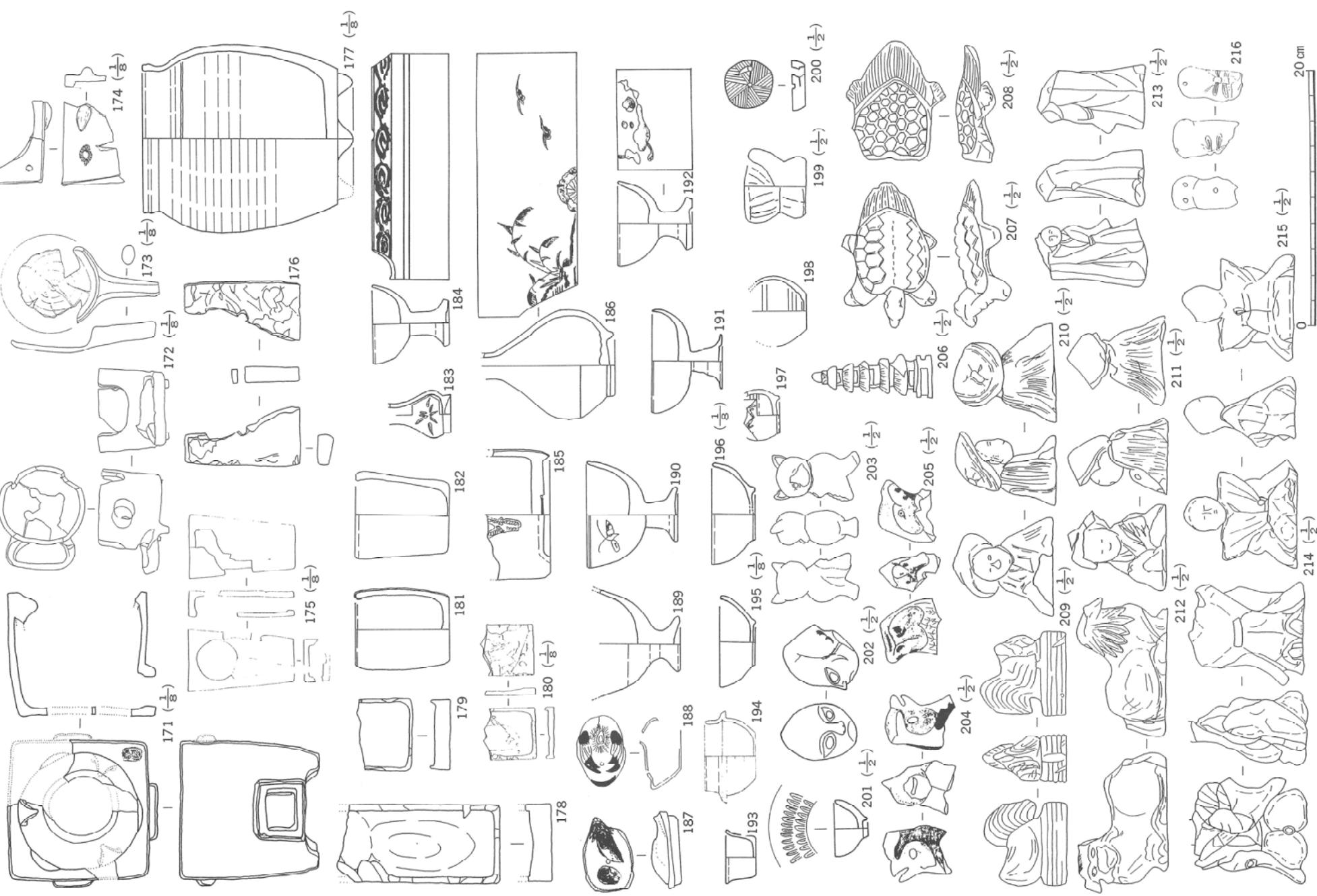


第112図 出土遺物実測図(6)



第113図 出土遺物実測図(5)

表4 出土遺物観察表(1)



撲因番号	No.	出土地点	器種	形狀特徵	法量(mm)			重量(g)	成形	装飾・釉薬	文様	様	装飾特徵	胎土色	印鑑	製作地	製作年代	備考
					a	b	c											
1	15-30V	碗	丸型	105	52	45	5	116	輪軸	透明釉	菊花文	コシニヤク 印版	白	乳白	肥前系	1600~ 1690	RP98	
2	SD58F ₁	碗	丸型	137	63	60	5	115	全	外花邊草	-	-	乳白	肥前系	1800~			
3	22-25IV	中碗	丸型	98	50	38	5	93	全	染付透明釉 内紅花文	外松竹梅	-	白	肥前	1690~ 1750			
4	23-30IV	中碗	丸型	95	54	35	3	50	全	染付透明釉	外梅	-	白	肥前	1690~ 1750	RP39		
5	SD58F ₁	碗	丸型	107	61	52	4	77	全	染付透明釉	外松竹梅	-	白	伊万里	-			
6	22-25IV	碗	丸型	94	77	51	4	120	全	染付透明釉	外繁鉄	-	白	肥前系	1690~ 1750	RP139		
7	22-31IV	碗	丸型	104	63	47	3	133	全	染付透明釉	外繁鉄	-	乳白	肥前	1690~ 1750	RP14		
8	20-31IV	碗	丸型	117	66	77	3	39	全	染付透明釉	外木葉山水	-	白	肥前	1690~ 1750			
7	9-31IV	碗	丸型	96	63	46	4	98	全	染付透明釉	外繁鉄接脚	-	白	中国系	-			
10	SD58F ₁	碗	丸型	90	66	52	4	160	全	染付透明釉 外鷺草花	-	-	白	肥前	1690~ 1750	FP64		
11	20-28	碗	丸型	103	55	44	5	173	全	染付透明釉 外二重綱目文	-	-	白	肥前	1650~ 1700			
12	27-29IV	碗	丸型	103	63	45	3	179	全	染付透明釉 外蘭花文	-	-	白	肥前	1650~ 1750			
13	20-30IV	碗	不整円型	113	69	46	4	194	全	染付透明釉 外草花文	-	-	白	肥前	1650~ 1750	RP15		
14	SD58	碗	丸型	113	64	45	4	172	全	染付透明釉 外旅草花繫き	-	-	乳灰	肥前	1650~ 1750			
15	SD58	碗	丸型	108	62	50	3	108	全	染付透明釉 外紅葉山水文	-	-	白	肥前	1650~ 1750			
16	21-26	碗	丸型	102	57	49	4	113	全	染付透明釉 外弘竹梅文	-	-	白	肥前	1650~ 1750	RP61		
17	23-26IV	碗	丸型	46	54	48	3	107	全	染付透明釉 水鶴丸文外腹 景文	-	-	白	肥前	1690~ 1750	RP27		
18	33-27IV	碗	丸型	91	47	35	5	162	全	染付透明釉 外梅繼文	-	-	乳灰	肥前	1700~ 1850			
19	SD53F ₁	碗	丸型	112	62	45	4	68	全	染付透明釉 外草花文	-	-	乳灰	底部太明 年製銘	中国系	-		
20	35-27	碗	丸型	106	61	44	3	126	全	染付透明釉 外雷雲文	-	-	乳灰	肥前	1650~ 1700	RP129		
21	33-31IV	碗	丸型	90	32	47	3	57	全	染付透明釉 外草花繫	-	-	乳灰	底部大明 化刻銘	中国系	-		
22	35-25IV	碗	丸型腰折	96	54	37	4	111	全	灰釉	高台無脚 燒風	-	灰色	京燒風	1800~ 1850	RP59		
23	33-30IV	碗	丸型	103	59	38	4	179	全	外草花	外区割花唐草	-	白	肥前	1650~ 1750	RP35		
24	25-30IV	碗	端反形	118	64	45	4	100	全	染付透明釉 外竹菖蒲文	-	-	乳白	肥前	1650~ 1750			
25	23-33IV	碗	丸型	104	60	40	4	133	全	染付透明釉 見込み松竹梅 口桜雷文	-	-	乳白	肥前	1690~ 1800			
26	21-25IV	碗	丸型	73	42	43	3	53	全	染付透明釉 外蝶唐草文	-	-	乳白	肥前	1650~ 1800	RP296		
27	23-37IV	皿	丸型	134	38	37	4	135	全	釉はげ	内花唐草繩文	-	底部無釉	乳白	底部一重 乳白角に高台 花瓶	中国系	-	
28	28-30IV	皿	輪花型	142	42	82	4	249	全	染付透明釉 外唇草繩文	-	-	乳白	肥前	1700~ 1800	RP95		
29	27-33III	皿	輪花型	127	30	75	4	111	全	染付透明釉 外唇草繩文	-	-	乳白	唐津	1700~ 1850			
30	18-37IV	皿	丸型	128	35	13	3	98	全	釉はげ	内花唐草繩文	-	底部無釉	乳白	底部一重 乳白角に高台 花瓶	中国系	-	
31	31-29IV	皿	丸型	136	33	77	5	181	全	染付透明釉 内見込み鶯文	-	-	乳白	肥前	1750~ 1850			
32	31-32IV	中皿	丸型	174	35	137	4	313	全	染付透明釉 内飛鳥風景文	-	-	乳白	肥前	1750~ 1850			
33	33-31III	皿	丸型	173	23	100	4	138	全	染付透明釉 内唇草文	-	-	乳灰	瀬戸	1750~ 1850			
34	33-31III	大皿	輪花型	273	41	154	4	782	全	染付透明釉 内唇山水文	-	-	乳灰	肥前	1750~ 1850			
35	33-30IV	小皿	丸型	93	22	47	3	62	全	透明釉	内瓢箪に「壽」 字	-	乳白	肥前	1750~ 1850			
36	33-30IV	小皿	全	93	22	46	3	78	全	同	-	-	白	肥前	1750~ 1850			
37	33-29IV	小皿	全	94	22	47	3	34	全	同	-	-	白	肥前	1750~ 1850			
38	33-30IV	小皿	全	93	22	46	3	76	全	同	-	-	白	肥前	1750~ 1850			
39	14-30IV	碗	丸型	130	47	60	4	191	全	灰釉	内盤關山水文	京燒風	灰色	「小松吉」 肥前	1850~ 1850			
40	トレンチ	碗	丸型	106	63	62	4	176	全	灰釉	外盤關山水文	高台無釉	灰色	「清水」 肥前	1850~ 1850			
41	31-31IV	皿	丸型	89	20	50	5	68	全	内盤關山水文	京燒風	灰色	「清水」 肥前	1850~ 1850				
9	42-28-27IV	碗	-	100	25	43	3	48	全	灰釉	外盤關山水文	京燒風	灰色	「新」 肥前	1800~ 1850			
43	SD-58	碗	-	100	28	46	4	25	全	灰釉	内盤關山水文	京燒風	灰色	「木下弥」 京燒	1800~ 1850			
44	34-26IV	碗	-	60	12	47	2	15	全	灰釉	外盤關山水文	京燒風	灰色	「清水」 京燒	1800~ 1850			
45	16-31IV	碗	-	130	38	50	4	57	全	灰釉	内盤關山水文	京燒風	灰色	「清水」 京燒	1800~ 1850			

第13図 出土遺物実測図(7)

表 6 出土遺物観察表(3)

種類番号	No.	出土地点	器種	形状特徴	法量(mm) a b c d	重量(g)	形 成 部	装 飾	胎 土 色	印・鉛 なべ	製 作	備 考	法量(mm) a b c d	重量(g)	形 成 部	装 飾	胎 土 色	印・鉛 なべ	製 作	備 考						
第	46	29-39IV	碗	-	97 20 62 3	25	醜	灰釉	-	京焼写し	灰色	木下弦	1800~	91	35-38IV	蓋	土瓶蓋山型	90 38 74 3	33	輻	染付透明釉	外	-			
	47	26-30IV	碗	-	55 12 53 5	30	全	灰釉	-	京焼写し	灰色	木下弦	肥前系	1800~	92	27-24IV	土瓶蓋	土瓶蓋山型	80 20 63 5	31	「」	染付透明釉	巴文	1800~		
	48	30-33IV	碗	-	74 17 52 5	61	全	灰釉	-	京焼写し	灰色	木下弦	肥前系	1800~	93	31-28V	土瓶	算盤丸形	94 150 83 3	458	「」	染付透明釉	山水文	1850		
	49	23-32III	碗	-	85 24 53 5	23	全	灰釉	-	京焼写し	灰色	木下弦	肥前系	1800~	94	32-25III	碗蓋	山蓋丸摘み	40 35 113 5	108	「」	染付透明釉	草花文	1900~		
	50	16-26	碗	丸型	103 60 47 4	61	全	灰釉	色絵若松文	京焼写し	灰色	木下弦	肥前系	1800~	95	33-31V	蓋	山蓋	162 32 5	148	「」	染付透明釉	外	1900~		
	51	33-34	土瓶 脣小口付	無高台平形見	114 27 50 4	86	全	-	褐	-	-	-	-	1800~	96	28-24IV	檀木鉢	端反口向筒型	181 103 76 5	397	「」	透明釉	-	1850~		
	52	12-29	燈明皿	無高台平形見	102 22 48 4	92	全	灰釉	-	灰色	美濃系瀬戸 言	1700~ 1800有り	R.P.7 焼締	RP.7 燒締	1850~	97	29-32IV	碗	腰張丸型口は げ	127 34 65 3	71	「」	染付透明釉	山水文	1850~	
	53	27-30IV	土瓶 脣小口付	無高台平形見	115 15 40 3	37	手づく	-	褐	-	-	-	-	1800~	98	19-18IV	中鉢	山蓋	170 100 62 5	592	「」	透明釉	底部無脚	乳白	1850~	
	54	29-30IV	土瓶 脣小口付	無高台平形見	113 21 40 3	26	醜	-	褐	-	-	-	-	1800~	99	23-25V	檀鉢	口縁折線形	355 175 154 9	3350	「」	透明釉	底部無脚	乳白	1800~	
	55	14-30IV	竹明 受皿	無高台平形見	107 15 42 3	33	全	透明釉	-	褐色	外波紋波線内 方格アラ真	210 238 177 1300	62	7 焼締	7 焼締	1850~	100	31-29IV	瓶	口縁折線	127 34 65 3	71	「」	染付透明釉	山水文	1850~
	56	27-28	片口力 ノテラ	片口力	74 95	4	87	壓取	透明釉	-	灰褐	-	-	1800~	101	30-32IV	ペコ力 シテリ	中折筒状型	17 174 57 6	514	「」	透明釉	底部無脚	赤橙	1850~	
	57	31-30IV	台皿付	台皿付	94 66 45 7	189	醜	灰釉	-	灰褐	高台無脚	灰褐	-	1800~	102	15-30IV	德利	不明	30 123 130 3	87	「」	透明釉	底部無脚	赤橙	1850~	
	58	25-25V	奉燭	台付	50 54 35 20	69	全	灰釉	-	灰褐	高台無脚	灰白	1800~	103	32-32IV	神酒 セキリ	不明	9 73 30 5	68	「」	透明釉	外蝶草文配	乳白	1850~		
	59	22-28	燈明 下皿	四形受皿	130 35 48 5	156	全	灰釉	-	灰褐	高台無脚	灰白	1800~	104	30-29V	碗	丸型	92 47 38 3	97	「」	透明釉	内重花文 内蝶草文	乳白	1850~		
	60	15-35	瓶	壺形	168 140 90 5	932	全	黄釉	-	明透	高台無脚	灰褐	1800~	105	31-31IV	碗	丸型	92 61 40 4	165	「」	透明釉	高台無脚	黄灰	1800~		
	61	31-29IV	瓶	壺形	130 146 84 7	917	全	金 銅 鉢掛	内刷毛目象嵌	赤灰	大宝寺焼	1850年代	RP.138 RP.139	RP.138 RP.139	1850~	106	SD58P. 1	茶碗	丸型	65 23 30 2	15	「」	染付透明釉	外草花区別文	乳白	1850~
	62	33-29V	片口鉢	口縁切込円形	173 68 73 5	312	全	灰釉	内 銅 鉢掛	底脚無脚	内 銅 鉢掛	大宝寺焼	1850年代	107	30-29V	碗	丸型	108 65 43 3	110	「」	透明釉	高台無脚	乳白	1850~		
	63	28-25	片口鉢	口縁切込円形	232 100 88 7	902	全	金 銅 鉢掛	内 銅 鉢掛	口縁切込 内 銅 鉢掛	内 銅 鉢掛	大宝寺焼	1800年代	108	23-25V	そば 縫口	丸型	70 59 42 3	91	「」	染付車花文	外草花文	乳白	1850~		
	64	SD58F. 1	鉢	口縁折縫形	335 125 127 9	1835	全	金 銅 鉢掛	内 刷 毛 目	赤褐	大宝寺焼	1850年代	109	34-29IV	猪口	丸型	65 23 30 2	15	「」	染付透明釉	春蘭にくも	乳白	1850~			
	65	23-26IV	壺	壺形	233 268 372 15	1	全	灰釉	-	乳灰	越前	1800~	110	東玄關	猪口	丸型	60 29 38 2	30	「」	高台無脚	高台無脚	乳白	1850~			
	66	31-29IV	土鍋	丸形双耳組形	155 58 53 3	147	全	金 銅 鉢掛	内 刷 毛 目	赤灰	大宝寺焼	1800年代	111	33-26IV	猪口	丸型	62 27 25 2	18	「」	染付車花文	外草花文	乳白	1850~			
	67	36-27	石製品 ねじ棒	鉢形	-108 -	32	1911	-	-	-	灰褐	大宝寺焼	1850年代	112	茶碗	端反丸型	68 34 30 3	45	「」	染付透明釉	内 草 花 唐花唐文	乳白	1850~			
	68	31-29IV	鉢	浅腹丸形段重	76 24 65 4	31	醜	透明釉	水葉繼文	-	乳白	及耳	不 明	113	25-25III	猪口	丸型	60 35 40 3	26	「」	染付透明釉	外草花文	乳白	1850~		
	69	33-30IV	白粉皿	浅腹丸形段重	56 35 68 3	49	全	透明釉	外彫落文	-	乳白	肥前	1700~	114	31-30IV	猪口	丸型	54 33 36 3	20	「」	染付透明釉	外草花文	乳白	1850~		
	70	23-31IV	白粉 段重	浅腹丸形段重	125 38 100 3	74	全	色絵	外亀甲文様	-	白	肥前	1780~	115	東玄關	茶碗	丸型	90 40 35 3	36	「」	染付透明釉	内 重 花 草 花文	乳白	1850~		
	71			浅腹丸形段重	45 57 85 5	434	全	染付透明釉	外彥松華文	-	白	肥前	1780~	116	21-32IV	茶碗	口彫端反	61 45 30 3	36	「」	染付透明釉	外 鷺文	乳白	1850~		
	72	31-30IV	白粉皿	浅腹丸形段重	95 45 76 4	67	全	透明釉	外彫落文	-	灰白	肥前	1780~	117	33-30IV	茶碗	丸型	72 37 30 3	50	「」	染付透明釉	外風景文	乳白	1850~		
	73	18-25IV	白粉 黒 段重	浅腹丸形段重	178 54 -	5	57	全	色絵	外 亀 甲 文 様	-	灰白	肥前	1780~	118	36-40IV	盃	丸型	77 46 42 4	61	「」	染付透明釉	内 草 花 唐 花 文	乳白	1850~	
	74	33-29IV	猪口	丸型	67 33 18 3	21	全	乳白	染付透明釉	外 亀 甲 文 様	-	乳白	肥前	1750~	119	34-23IV	杯洗v. 八角縁	八角縁	146 87 85 5	2090	「」	染付透明釉	外 鷺文	乳白		

表7 出土遺物観察表(4)

挿図番号	No.	出土地点	器種	形状特徴	法量(mm)				重量(g)	形或	表	飾	胎土色	印・鉛など	製作地	製作年代	備考
					a	b	c	d									
136	33-30IV	櫻	板状	長さ80.7	6.7	60											
137	SD-58 F ₁	飾り金具	板状	長さ66.2	1	8											
138	SD-58 F ₁	家具の把手	棒状	長さ12.2	5	24											
12	139 32-26IV	煙管雁首	雁首	20	6												
140	25-24IV	々	々	10.8	7												
141	28-32IV	々	々	10.3	9												
142	35-28IV	々	々	10.2	5												
143	34-25IV	々	々	20.5	8												
144	21-29IV	箱縫口	大型	56	21	22	3	1		輪轆	色绘透明釉	羽子板	—	乳白	肥前	1800~1850	
145	SD58 F ₁	煙管吸口	棒状半空	長さ72	4												
146	28-24IV	々	々	長さ68	6												
147	々	々	々	長さ71	4												
148	33-25IV	々	々	長さ71	4												
149	25-34IV	々	々	長さ56	5												
150	24-35IV	々	々	長さ56	3												
151	29-36IV	刀子	板状長方形	13	95	1	12										
152	28-31IV	刀子	板状中さん	13	73	0.5	11										
153	調査区X-0	刀子	板状	12	53	1	14										
154	31-32IV	刀子	小刀型	10	73	0.5	11										
155	33-34IV	把手	板状曲物	8	292	6	18										
156	1 レンチ	檻底板	木製円形取板	110	105	6	18										
12	157 29-39IV	漆碗			15					内面赤漆外 面黒漆							
158	16-25IV	不明	木製平板		45												
159	調査区Y-0	箇	木製		15					黒漆							
160	25-25IV	木蓋	木製丸型	188	19	135	155										
161	23-24	下臥	木製下臥	長さ210	90	15	34	193									RW144
162	28-24	下臥	連歛下臥	長さ200	74	31	—	176									RW140
163	27-27	木栓	木製筒狀	26	69	13	—	21									
164	29-27	木栓	木製筒狀	35	95	17	—	57									
165	29-24	加工木	一面階段上 削りあり	267	108	16	—	583									
166	27-27	箸	棒状木製	5	266	5	6	6									
167	27-27	箸	棒状木製	5	256	4	7	6									
168	27-27	箸	棒状木製	3	255	3	7	5									
169	SD58 F ₂	木桶把手	木製		92												
170	SD58 F ₂	木桶	木製	14	310	3	14	25									
171	16-27	七星	脣部窓口	215	319	11	3192	ろくろ	紐作り	調整							1800~1850 RP172
172	28-30IV	七星	脣部窓口	123	112	2	7	622	ろくろ	紐作り	調整						1800~1850 RP172
173	30-29IV	縁沿	縁沿輪待ち手	—	—	—	—	250	らくろ	—	—						東製精良
174	32-31V	こんろ	箱型		301												横縫部に打痕
175	37-29IV	風口	筒型		359												滑石製
13	176 24-31IV	温石	長方形		2	94											1750~1850 RP58
177	30-29V	墨壺	墨壺形	234	325	210	14	5341	灰釉								黒色泥岩
178	25-25III	硯	長方形					279									灰色泥岩
179	32-29IV	硯	長方形														灰色泥岩
180	31-30	硯	長方形														

表8 出土遺物観察表(5)

挿図番号	No.	出土地点	器種	形状特徴	法量(mm)				重量(g)	成形	絵付・細葉文	模様	装飾特徴	胎土色	印・鉛など	製作地	製作年代	備考
					a	b	c	d										
181	28-30IV	香炉	胴筒型		58	74	51	5	133	輪轆				乳白	—	潮戸		
182	29-30IV	香炉	胴筒型		65	73	54	4	185	透明釉				乳白	—	潮戸		
183	28-32IV	神酒	口縁篠利		-	48	31	3	25	々	染付透明釉	外草花文		乳白	—	潮戸系		
184	34-22IV	仏飯器	九型台底輪高音		62	60	34	4	85	々	染付透明釉	外草花文		乳白	—	肥前系		
185	33-32V	花生	筒状無三足		-	50	94	6	153	々	染付透明釉	外草花文		乳白	—	美製		
186	30-28V	神酒	口細胴張型		-	185	50	5	159	々	染付透明釉	外草花文		乳白	—	肥前系		
187	23-26IV	水滴	なす壺		-	22	51	-	27	合せ	染付透明釉	外草花文		乳白	—	RP52		
188	26-31V	水注	水鳥型		-	33	32	2	18	上下型合せ	染付透明釉	外草花文		乳白	—	RP91		
189	23-24IV	高杯	台輪高台		-	63	42	4	74</									

瓶類

土瓶のみである。93は相馬焼系の帆掛け船絵である。91・92は土瓶の蓋である。

甕類

甕は大・中・小がある。大甕（65）は口径が胴部最大径の約1/2となり、胴部の膨らみが器の中位になるもので、越前焼である。中甕（60）は口径が器高より大きく、胴部の最大径と同じ径である。美濃瀬戸系である。小甕は口径より器高が高く、胴部の膨らみが器高の中位よりやや下にくる。在地産の大宝寺焼である。

陶器でそのほかの器種は、82の髪盥（ひんだらい）、83の蓮華がある。髪盥は平面形が細長い楕円形を呈した盥形の容器を指す。整髪の際、五味子（さねかずら）を水に浸して作った整髪料を入れ、櫛を浸すのに用いたもので灰釉菊花文髪盥である。83は杓子類にはいる。小型でハート形の容器に手がつくもので、手の部分が欠落している。緑釉草花が型押しされている。瀬戸系である。

(2) 磁器（第7・8・10・11・13図・図版5）

調査で出土した磁器は整理箱にして24箱を数える。器類としては、小碗・中碗・大皿・小皿・猪口・中鉢が圧倒的に多く、大碗・壺・紅猪口・仏飯具・小皿・蓋物・段重・神酒徳利・水滴がそれに続く。蓋物は、身の出土量に比して非常に少ない。また、そのほかの器種では、うがい茶碗・壺洗い・花生・徳利・人形・玩具等が出土している。

碗類

碗は底部から湾曲または屈曲して立ち上がり、手に持てる大きさと重さを持つ容器で、高台もしくは台を備えるものを碗とした。形状では丸型（1・3～5・7・8・11・12～21・24・73・75・76・79・85・86）、筒型（6・9・10・26・40・50・88）、端反型（23・25）、浅半球型（2・39・45・81・87・89・106）がみられ、口径の大きさで121cm～150cmを大碗、101cm～120cmを中碗、100cm以下を小碗に分けた。丸型の大碗の用途としては飯碗、抹茶碗、うがい茶碗等と考える。73は鉄撻壺（かねつき）である。口唇部には鉄撻水と五倍子粉（ふしのこ）を混ぜ合わせ乾燥したものが付着している。器の外面には赤絵の草花文が描かれており、肥前産の色絵磁器である。90はうがい茶碗と考えられ、焼継ぎ痕がみられる。外面に折松葉に花文、内面に紅葉文が描かれた肥前産の磁器である。中碗とした器の用途としては、飯碗、抹茶碗、煎茶碗、酒壺等である。1・5・18・19・20等は粗雑な文様を描いた波佐見系の「くらわんか手」と考える。しかし19は丁寧な文様の染め付けが施されている。中碗の主文様は、花唐草・菊花・梅花・氷割菊花・蘇鉄・雨降・草花・編目・花鳥等の染付文様が描かれている。小碗とした器は片手の指の腹で軽く持てる大きさで、用途としては湯呑み茶碗、煎茶碗、酒壺等が考えられる。形態的には端反型が多く酒壺として利用されたものと考える。また、内面見込みに五弁花のコンニャク印版が押されたものがある（25）。104の内面見込みには「成化年製」銘がはいる。小碗の文様は26の蛸唐草文や4の草花、6・18の松竹梅文、3の菊花散らし、87の渦文等が描かれている。

皿類

皿は底部から湾曲または屈曲して立ち上がり見込みが浅い器を皿類とした。口径の大きさで270cm以上を大皿、120cm～150cmを中皿、100cm以下を小皿と分けた。32は口縁に唐草文、外間に折松葉文、内面見込みに飛雁風景画が粗雑に描かれた皿である。33は外間に折松葉文内面見込みに牡丹が描かれた皿で、肥前系と考える。34は内面に山水画が描かれている。中皿は輪花皿となる28・29を図示した。28は外間に唐草文、内面口縁に花唐草、見込みに梅花が丁寧に描かれている。29は外間に唐草文、内面口縁草花文、見込みに五弁花のコンニャク印版が押され、裏底に「大明年製」銘がはいる。小皿は35～38の内面に瓢箪に寿字と渦福字銘がはいる揃い皿である。

段重類

段重は底部径と口縁径がほぼ同一で、内面口縁に重ねの釉禿がある。径の大きい71は側面に鼓文に松葉が描かれた白粉段重と考える。側面の文様が花文（68）、瓔珞（ようらく）文（69）、亀甲文（70）等が染付された段重である。68は紅入れと考える。

壺洗い類

壺洗いの器として確認できる器は119と120である。119は見込みに布袋を描いた八方鉢、内面に鬼面を描いた輪花鉢120である。

壺類

壺は薄手酒壺で109の「卵殻手」江戸絵付けや、「判じ絵」で短冊に八つ橋の文字が読める110、「錦書」された111等がある。

鉢類

鉢は山水画が描かれた97が図化できた。身が深く肉厚な器壁である。

蓋類

蓋は身となる鉢が絵模様で一緒になるものは確認されなかった。94は水仙に草花の染め付けが描かれている。95は荷締めが描かれている。肥前産である。

猪口類

猪口には酒席で使用される壺と化粧用具として使用される紅猪口がある。106・108～117は酒席での猪口で、並菖蒲（106・108・113・114）、笠文（117）、若松に鶴（116）、並寿字（118）、等の染付けが施されている。74・144は紅猪口である。薄手の壺で器の外面には、羽根と羽子板が描かれている144と、「是なくハ□□之ノ如シ」の文字が書かれた74があり、両者とも肥前産の色絵磁器である。144は東京都細工町遺跡出土と同一である。

そのほかでは、仏飯具（184・189～192）、神酒徳利（183・186）、水滴（187・188）、玩具（193・195～197・201～205）が認められる。

3 土器（第13図・図版8）

土器としたものは、無釉で焼締めされたものを示す。灯明皿(51～55), 七厘(171・172・174), 焙烙(ほうろく)(173), 風口(かざくち)(175), 炭壺(177)である。灯明皿は「かわらけ皿」と呼称される平形の無高台の皿である。底面が丸形となる53と平底となる51・52・54・55に分けられる。54の底部には静止糸切り痕が残る。七厘は箱形となる171・174, 丸形の172がある。焜炉の一種で胴部下方に風口の窓がつく箱形と、風口が舌状に出ている丸形である。焙烙は現在のフライパン形になったものである。豆や茶葉を炒ったものと考える。風口は七厘の内部に効率的に風を送る用具である。炭壺は過度の炭の消耗を保つ壺である。製作地は不明である。

4 土製品（第13図・巻頭図版2－2, 図版9）

土製品には人形6点, 像9点, 白1点, 石白1点, 茶碗4点, 釜1点, 徳利1点, 甕2点の25点が出土したが, 内19点が破損している。これらは陶磁製と素焼き製で, いずれも型作りで, 底面に空気抜きの穴がうがたれている。雛飾りや, 箱庭道具, 飯事道具となり, 人形の210・211は釣人である。笠と蓑を被り, 前面に竿を差す小穴がある。瀬戸美濃系の陶製である。214は太鼓を打つ膝立ち姿で, 215は謡人で袴姿で正面を見据えた姿勢で五人囃の一部である。213は母子立像で母親に寄り添う形である。212は座狹である。「羽衣狹」とも呼ばれる。207・208は緑毛亀であり獸に近く, 208は首が亀首緑の毛を生した亀である。201は鶏である。これらは, 雛段を設けて飾り遊ぶ道具である。206は箱庭道具の五輪塔である。飯事遊びと共に利用した道具である。臼, 石臼, 釜, 茶碗等は飯事道具である。炊事を模倣した女子の代表的な遊びである。216は飾り馬である。

5 木製品（第12図・図版10）

木製品には, 蓋(160), 下駄(161・162), 底板(156), 木栓(163・164)で, 箸(166～168), 柄杓の柄(170), 桶の引手(169), 不明木製品(165), 「廣間」と墨書きされた木片(158), 漆塗りの櫛(159), 草花が描かれた漆塗り椀(157)が出土している。

6 石製品（第9・13図・図版8）

石製品では身体を温める温石(176), 研(178～180)がある。

7 金属製品（第12図・図版9）

金属製品では釘(121～124), 火箸(125・126), タンス等の引手や飾り金具(127～138), 煙管(139～150), 刀子(151～154), 古銭(第5図1～20)の出土が確認されている。煙管では139～143は雁首で, 145～150は吸口である。煙管は雁首の形態で編年が示されており, 脂返しが湾曲する139・143は比較的古い形態を示し, 脂返しが極めて短く肩も無い140～142は新しい型といえる。古銭は34～26グリード層第IV層で一括して出土した寛永通寶(9～20)と, 調査区第IV層中より出土した洪武通寶, 元符通寶, 元豊通寶である。8・18～20はいわゆる文銭である。

V 調査のまとめ

本遺跡の発掘調査は県立高等学校校舎等整備事業（体育館）建設にかかる緊急発掘調査である。調査は城館跡を学校敷地としている中で実施されたが, 亀ヶ崎城が幕末に廃城となってからは, 明治政府による酒田県の県庁, 旧制中学校の校地, 戦後の新制高等学校の校地と, 一貫して公の土地となってきたことから, 比較的破壊が小規模なことから遺構の残りは確認できた。しかし, 江戸時代の城代家老職が変わるとときや, 明治時代からの施設整備による盛土が160cm以上にあったため, 当初の調査計画での遺構確認に時間を要した。しかし, 検出された遺構は礎石建物跡の一部と, 列石一条が確認された。検出された建物跡の遺構は, 貞亨年中図として保存されてきた亀ヶ崎城図に記載された位置と同位置に確認されている。調査区は絵図による城代家老職の屋敷地内とあり, 検出された遺構や出土遺物は武家社会の様相を示した内容であった。以下に遺構と遺物に分け, まとめとする。

検出された遺構では礎石建物跡の礎石が径60cmから85cmと大きい偏平な自然石を利用している。太い柱を支えることや, EX60性格不明遺構の角材が地中深く打ち込まれていることなど, 大きな建物の存在を窺わせ, 絵図に記載された城代家老職の屋敷跡として確認できる。また, 列石は絵図に記載されている次席家老職屋敷との境界と考えられる。

出土した遺物で, 出土層位からの製作年代では, 埋め土I層からは昭和期の大政翼賛会の記念茶碗や旧制中学校時の湯呑み茶碗等, 現代までの陶磁器が出土している。礎石が検出された第IV層からは, 京焼写し(註1)とされる肥前鍋島藩窯で製作された陶器の碗や, 同じ肥前系の磁器や唐津焼・瀬戸美濃焼系の陶器等が出土し, 東北出羽国への日本海物流が認められ, きわめて豊かな生活が窺える。

製作年代からの時期では古いもので, 江戸中期1650年代中頃から新しいもので幕末の1850年代の遺物が中心であった。出土磁器や陶器は更に細かな年代が当たられるが, 今後に細分作業を課題したい。

註1 京焼については、「京焼写し」・「京焼風」などと呼称にあいまいさがあり, 本書では, 鈴木重治編「徳昭館地点・新島会館地点の発掘調査」1992

第3章, 第1節 考察 定義と分類 によった。

その他, 本報告書の作成にあたり, 遺物の器類や染め付け文様等の判断には, 以下の報告書を参考にした。

新宿区厚生部遺跡調査会編「細工町遺跡」及び「内藤町遺跡」1992

扇浦正義著 「江戸発掘」 1993

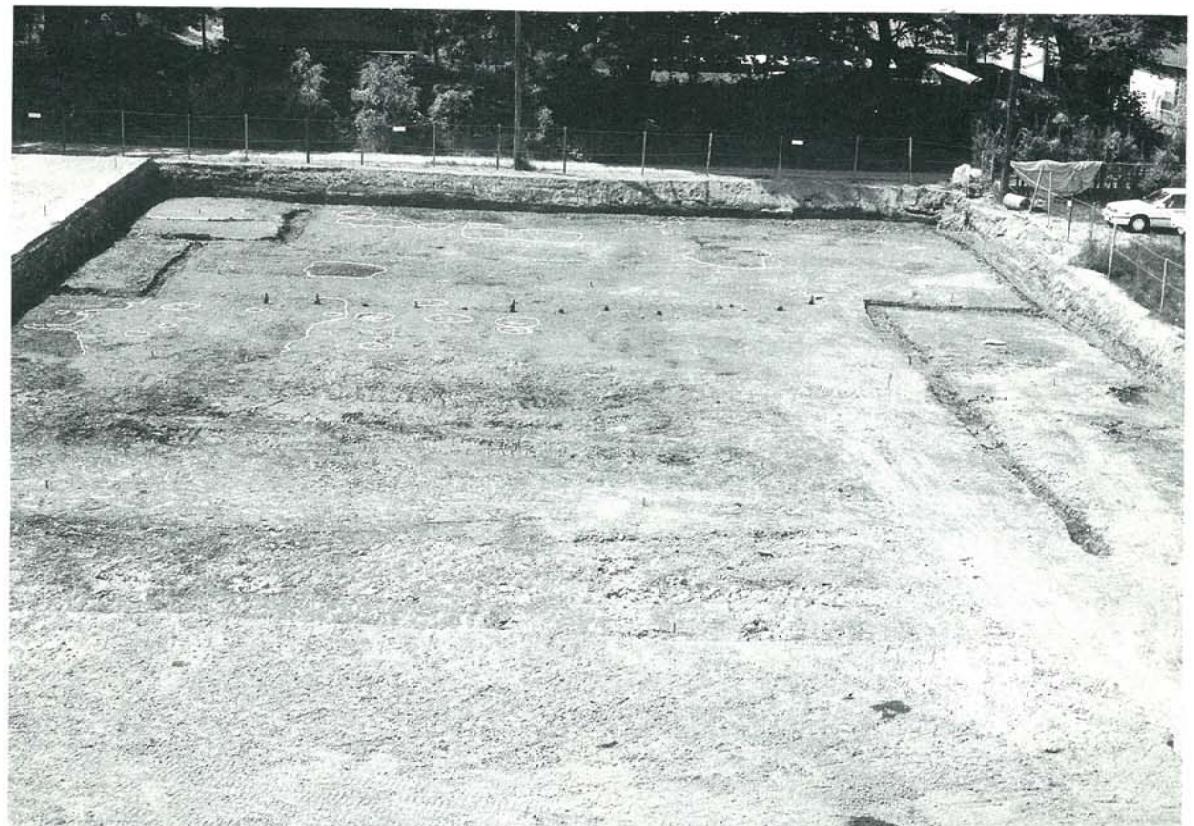
報告書抄録

ふりがな	かめがさきじょうあとだい2じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	亀ヶ崎城跡第2次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第17集
編集者名	野尻 健・川田嘉信
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301
発行月日	西暦 1994年3月31日

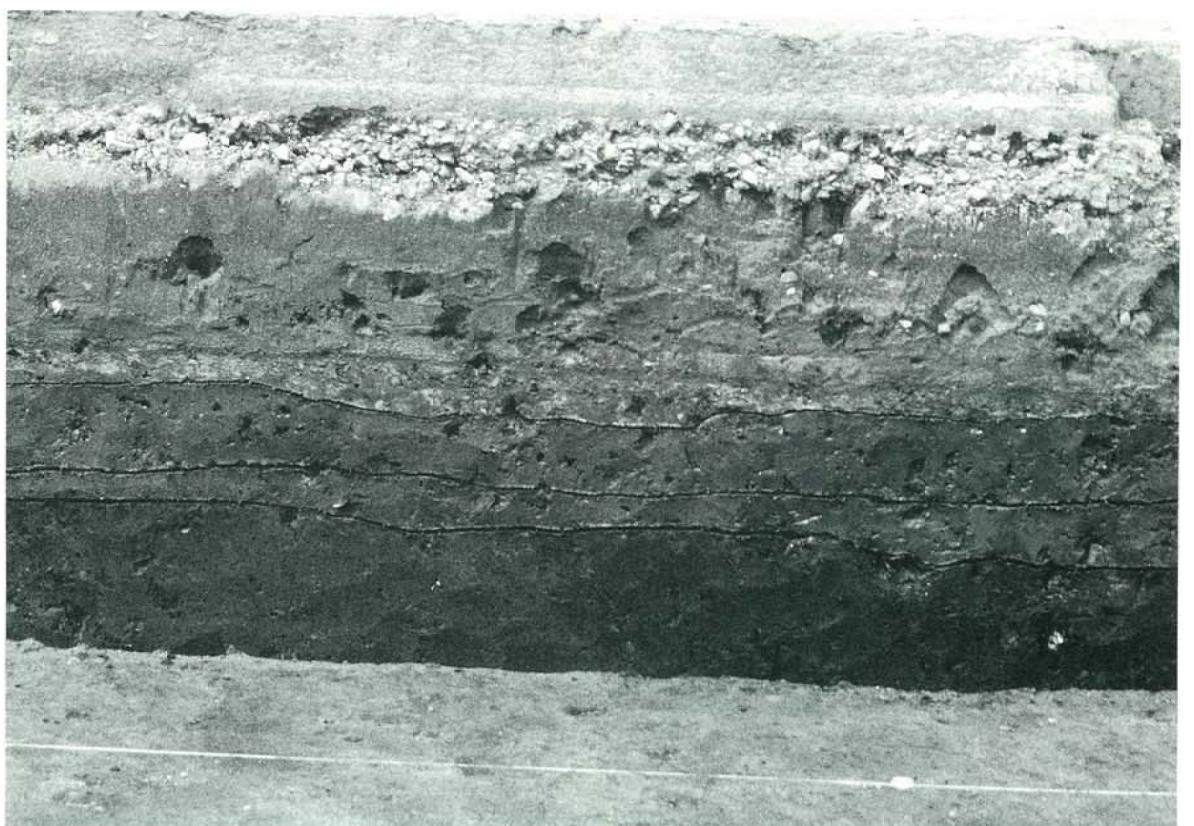
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
亀ヶ崎城跡	山形県酒田市亀ヶ崎	6204	2071	38度54分65秒	139度50分63秒	19930511～19930804	4,080	県立高等学校校舎等整備事業(体育館)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
亀ヶ崎城跡	城館跡	江戸時代後期	礎石建物跡 石列	1軒 1条 近世陶磁器	二の丸内の城代屋敷跡を検出

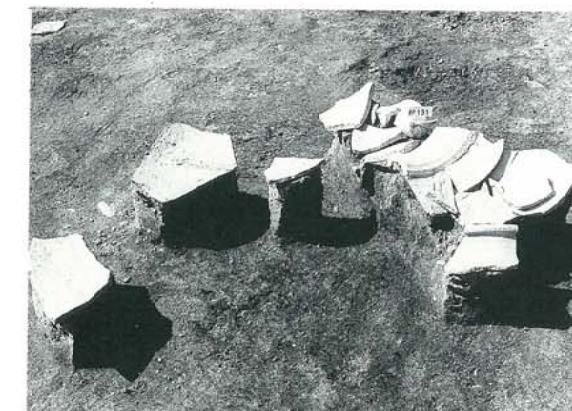
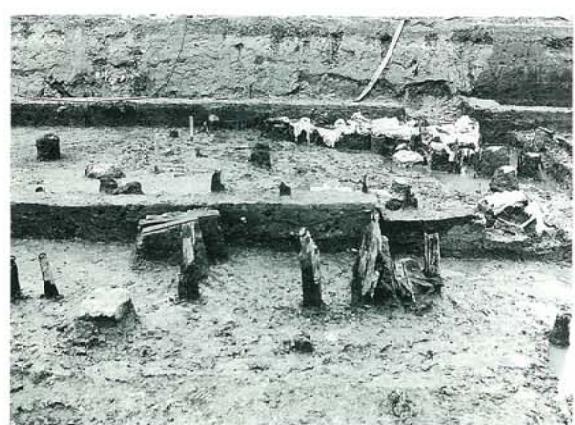
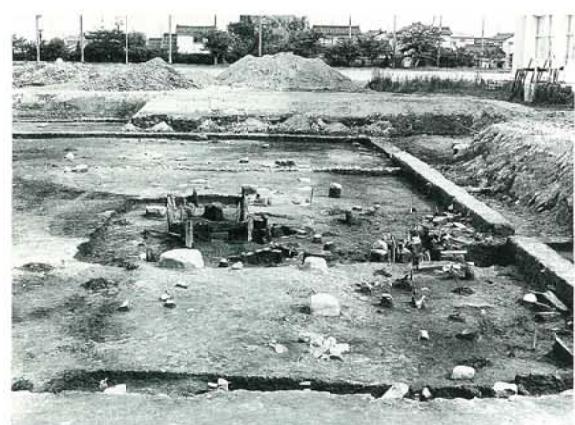
図版



調査区全景



遺跡の層序



RP 131出土状況



RP 16出土状況



RP 173, RP 183, RW178出土状況



RP 58出土状況



RP 32出土状況



RP 37出土状況



RP 172出土状況



R P 23陶質人形出土状況



R P 38亀形土製品出土状況



R P 36鳥形土製品出土状況



R P 59壊洗い出土状況



RM 46取手出土状況



三島手唐津出土状況



底板出土状況



調査風景



花唐草文



三方松竹梅文



松竹梅文



雨降文



笹文



松竹梅文



紅葉文



丸窓山水文



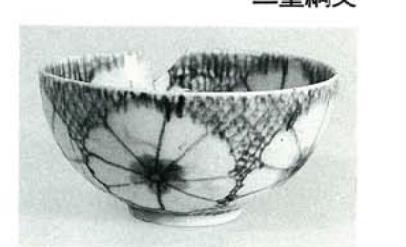
二重綱文



竹梅文



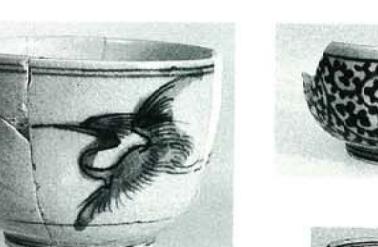
蘇鉄文



冰割菊花文



松竹梅文



飛鶯文



蛸唐草文



水仙文



「成化年製」銘



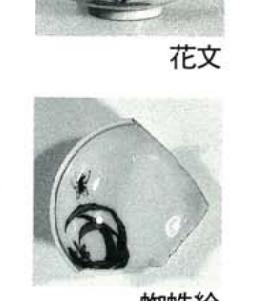
坏 丸窓草花文



猪口 草花文



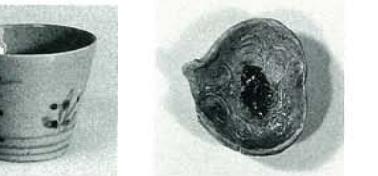
「寛林」銘 亀絵



蜘蛛絵



飛蝶文



蕪猪口草花文



蓮華（陶器）

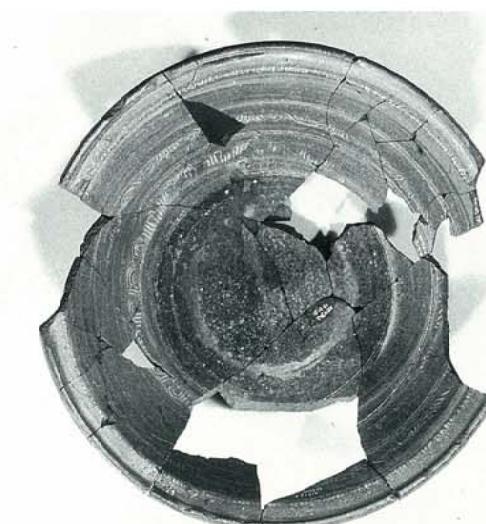


腰折碗 草花文

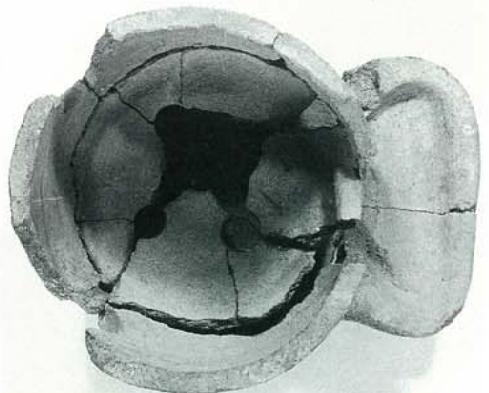




植木鉢



三島手唐津



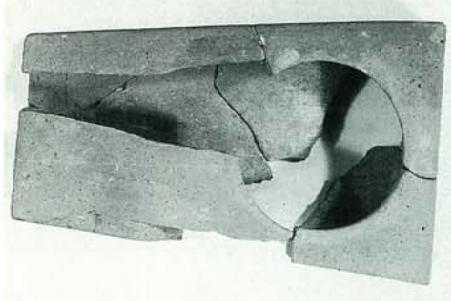
七厘



練鉢（三島手唐津）



七厘

ほうろく
熔烙（横から）

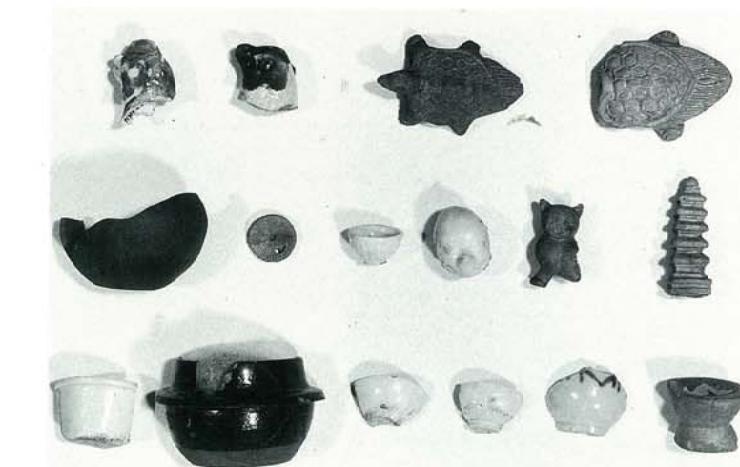
風口



温石



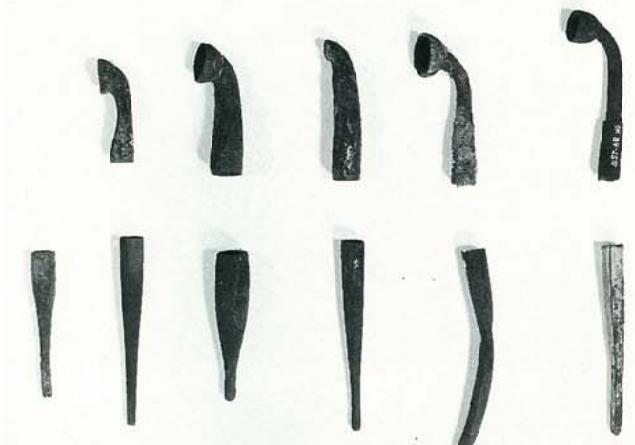
消炭壺



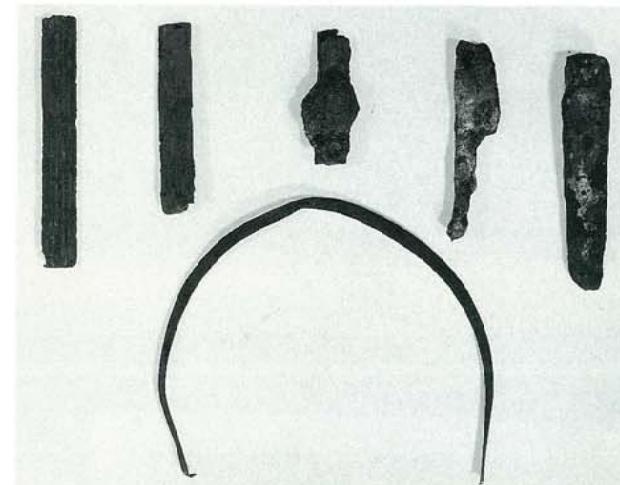
雑飾り、飯事道具



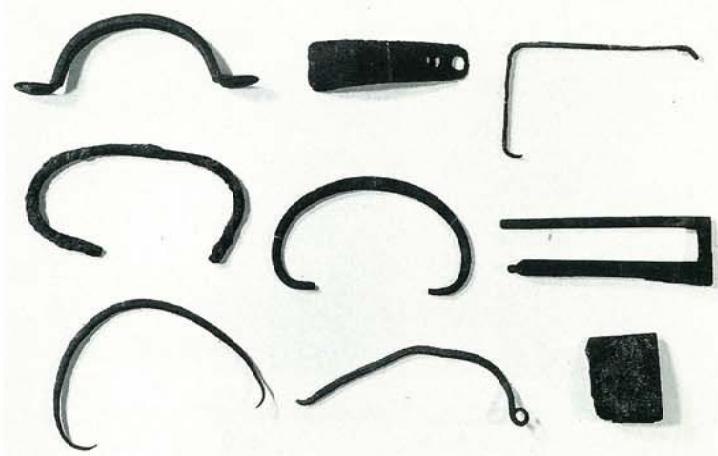
土人形



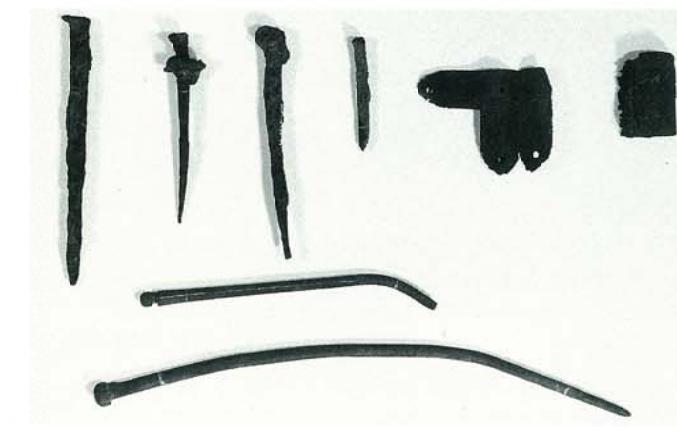
煙管



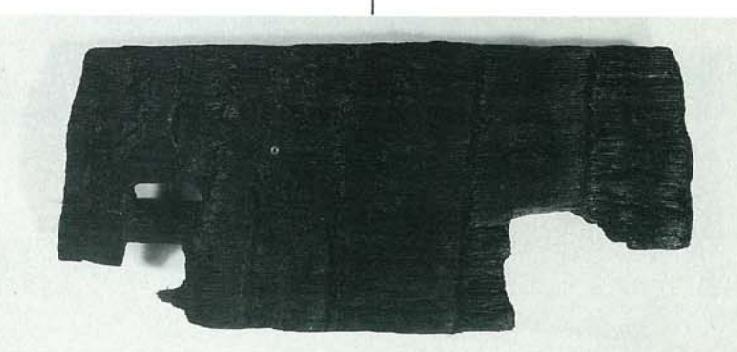
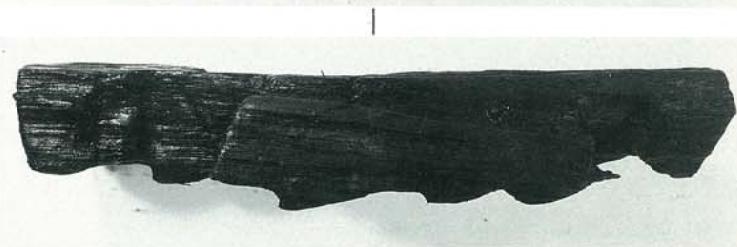
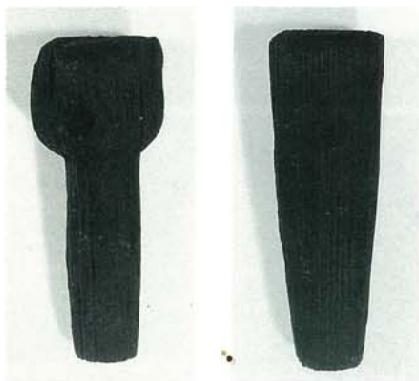
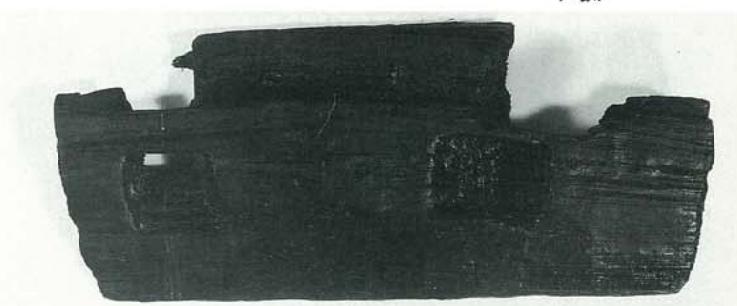
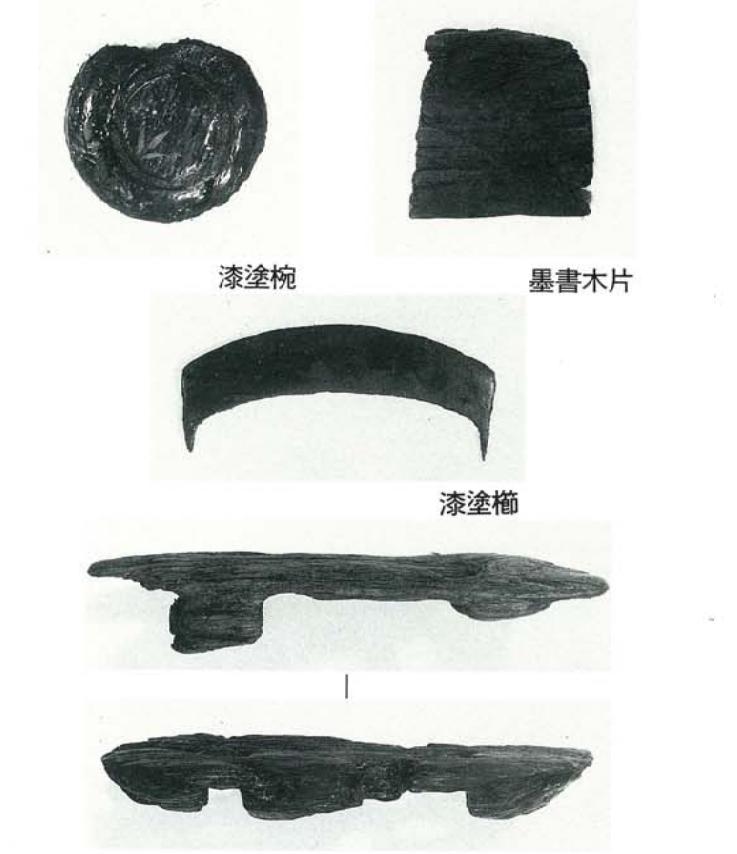
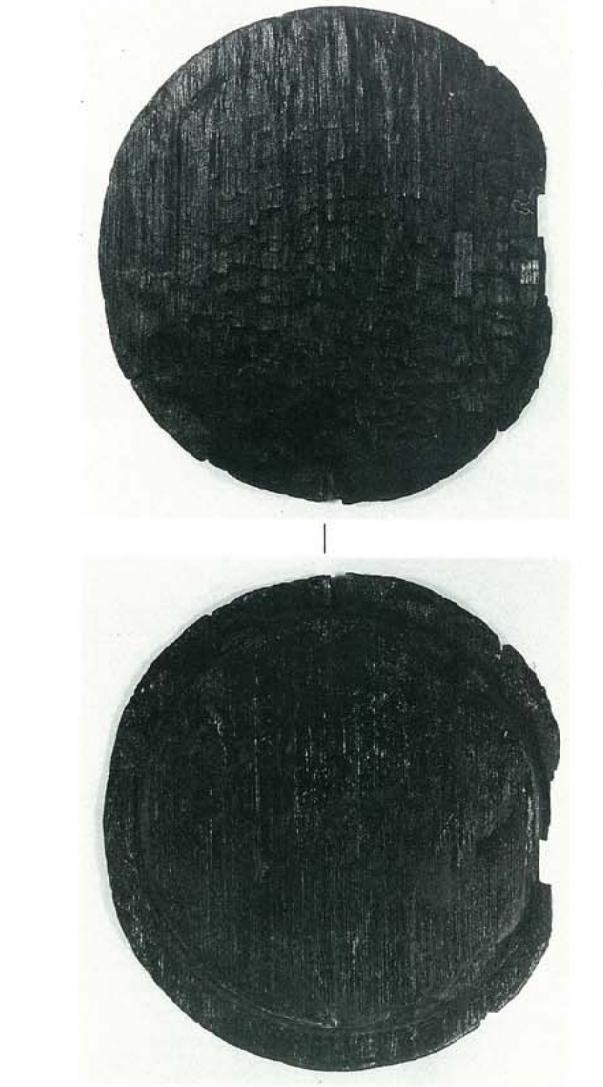
刀子、鍋取手



取手金具



釘、角金具、鞘当、火箸



用途不明木製品

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第17集

かめがさきじょうあと
亀ヶ崎城跡第2次発掘調査報告書

1994年3月31日 発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 0236-72-5301

印刷 (株)大風印刷